

もったいない・おかげさま・ほどほどに、が環境と人間を育てる

M・O・H通信

M・O・H communication

21号

2008

Autumn



テーマ「未来」—わたしが創る未来の暮らし

■特集：沖縄

(photo) 辻本 誠



contents

目次

テーマ「未来」——わたしが創る未来の暮らし

■特集／沖縄

阿波連永子スケッチの旅

ふるさと沖縄 阿波連 永子……5

M・O・Hレポート1 押し寄せる問題に、ともに立ち向かう

同じ島に暮らす住人として——アジェンダ21研究会うるむい……9

M・O・Hレポート2 環境のことを常に念頭に置いて——

沖縄でなくてはならない企業を目指して 和宇慶 ミツ子……17

M・O・H鼎談 千年を経てなお、燦然と輝く『源氏物語』から

人間の普遍とは——中井二三雄 & 畑裕子 & 森建司……21

シヨート・シヨート

ふれあい 第十二回『お兄ちゃんはペンギン?』 中井二三雄……28

EEネット記念大講演会より

便利をスコシ捨てる と何かをタクサン得られる! 藤村 靖之……29

M・O・Hレポート3 未来へ続く暮らしを手に入れる

農業”新”世代 前田 壯一郎……35

M・O・Hレポート4

端材は創造のおもちゃ箱 端材工房……41

M・O・Hレポート5

地域の技術とつながる住まい 清水 安治……43

もつたない学会便り ……47



復元された首里城

環人会ツアーVOL.3「守山ツアー」

美味しいシソジュースで元気になろう

比良の元気なシソを作る会……… 55

「人間の学」(森信三先生著)を読む その四

井上昌幸……… 57

〈商家の家訓の話 第六回〉

矢尾喜兵衛の所感(四)末永國紀……… 59

MOHECOTOURISM 10

ツーリズム最前線—

トレイルスルーで見えたもの

檀上俊雄……… 61

「限界集落を無限集落に?」(漫画)

オノミユキ……… 65

イベント紹介 …… 69

「心の友たちフレデリック—

今関信子……… 71

講演日記 …… 73

MOHニュース …… 74

「セミ」三山元暎……… 75

本の紹介 …… 76

MOH通信概要 …… 77

読者からのお便り …… 78



「M・O・H」のマーク=牛

牛は環境の象徴ともいえます。牛糞はメタンガスになり、肥料にもなります。大地を作り、食物を育て、生物を養います。私たちは命の源ともいえる、牛を「MOH」のマークとし、循環型社会の象徴とします。

★MOH通信の役割★

持続可能で豊かな循環型社会を築く社会人の意識を向上するためMOH通信は情報を発信し交流を続けます

M → もったいない

循環

他の生命を奪って得たものを使わせて頂く

O → おかげさま

共生

人は一人では生きられない、環境によって生かされている

H → ほどほどに

抑制

欲はほどほどに、良き環境を作り上げるために



■特集:沖繩 — 平和・環境・ジェンダー



沖縄へのプロローグ

弊誌は、『環境倫理の啓発交流誌』として発刊から5年目を迎えました。発刊当初の、『大量生産・大量消費・大量廃棄の経済活動を改め、地球と人類が持続可能な循環型社会を作る』という定義は挑戦的なものでした。森代表の『このままでは地球がだめになる』という言葉は、多数の「そんな事あるかいな」という意見にかき消されていきました。

今や『低炭素社会の実現』が経済界あげての合言葉となつていきます。テレビや新聞などマスメディアは、『地球の危機・石油供給の悪化・人類存続の危機・CO₂削減』を特集するようになりました。『スローライフ』が注目を集め、『地産地消で食料確保』は新ビジネスとして注目を集めています。

しかし「何か大事なものを忘れている」ような…。自分の生き方が見つけられず迷いの中にいる人や、不安を抱えて生きる人、孤独の中にいる人…。人間が「おいてけぼり」？

森代表は『転換力で時代の波に乗れ』と提唱しています。でも何にどう転換すればいいの？いくつもの迷いを抱きながら、母の懐に飛び込む思いで、沖縄取材し女性たちに学びました。

『平和・環境・ジェンダー』何かが見えてきました。

(編集局)

阿波連永子スケッチの旅

ふるさと沖縄



残波岬

わたしの父は200才まで生きると
いうのが口ぐせでした。昨年満100
才を向かえ、200才への人生を折り
返しました。

「1世紀を生きる」私の父はセンチ
ユリアン（1世紀を生きる人）の仲間
入りを果たしました。たいへんめでた
いことですし、娘として、とてもうれ
しいことです。でも、年齢のことを考
えると、会える時に会っておこうと、
昨春秋、父に会うことを目的に、ふる
さと沖縄へ行ってきました。もちろん
絵も描いてきました。

わたしの友人の御夫婦が、車であち
こちを案内してくださり、わたしに絵
を描かせてくれました。残波岬や中城
城跡などをスケッチしました。その時、
残波岬が余りに美しかったので、翌日
一人でバスに乗り、再び残波岬へ行
きました。限りなく青い海は、私の最も
好きな世界です。延々と続く断崖絶壁
に打ちつける白い波のざわめきがここ
ちよく、この広い東シナ海の向こうは、
私の遠いご先祖の国、中国なのかなあ、
と思いつつ、絵を描くよりも、ずっと



水牛



アヒル



首里石畳

眺めていたい心境でした。

12月に入ると、私の住む滋賀県では、朝夕はぐっと気温が下がり、寒くてもう冬なんだ、と思うころですが、ここ沖繩では寒いという感じは、まったくありません。夜明け前の、まだ満天の星空の5時頃から、多くの人達が、ウォーキングや体操をするために、小学校の運動場に集まってきます。私も2週間でしたが、毎朝参加して一緒に体操をし、多くの方と友達になりました。

早朝といえば、那覇市内に、のうれん市場があります。私はその市場が大好きで、5年前にも何枚もスケッチをしました。そして今回も朝4時から市場に行き、沖繩で一番の元氣者のオバア達の小さな店をスケッチして回りました。古びたアーケードと昔ながらの商店がさほど広くない道の両側に続きます。

どこの街でも見られる商店街の風景ですが、のうれん市場では、そうした商店の前に、さらにオバア達の小さな店が所せましと並びます。小さな机1つ分ぐらいのスペースにおもいおもいの商品を並べて売っているのです。5年前と



のうれん市場



首里の民家



のうれん市場

同じ風景です。オバア達の陣取る位置も、そこに座るオバアも同じ顔ぶれです。2時から来ているというオバア達の元気さと、底抜けの明るさは5年前と少しも変わりません。一応オバア達に絵を描くことを伝えてから、何枚もスケッチをしました。

かなりの高齢の方がほとんどで、深いシワが刻まれたオバア達の顔には、おそらく戦中戦後の苦難を越えてきたであろう人の、生きる喜びと、自信に満ちた強さと、やさしさの表情は共通だった。

何人もオバア達を描き終えて、片付け始めると、最後にスケッチをしたオバアが「ねえさん、ようがんばるね。おなかですいたる、食べなさい」と言って、朝食用の弁当を出して、私に食べるようにすすめてくれました。オバアの朝ごはんを食べてしまおうわけにはいかないのので断ったのですが、結局半分いただく事になりました。オバアのやさしい心がしみていて、とてもおいしかったです。ふるさと沖縄の心も一緒にいただきました。

（アカシヨウビンだより第6号 2008年4月発行より）



竹富島



ふるさとの夕日



流舞い

阿波連永子

●あわれん えいこ 沖縄県出身。滋賀県
展特選5回、京展特選4回、新制作展入
選15回。個展は1990年木下美術館、
1993年沖縄県浦添市美術館、199
6年・2003年滋賀県立美術館その他
多数。1995年戦後50年沖縄の美術
展出品依頼、1996年滋賀県展50年
記念展出品依頼。滋賀県美術協会会員。
木工作家の渡辺徹夫氏とギャラリーアカ
シヨウビン（永源寺）を主宰。

●ギャラリーアカシヨウビン 117527
10204 滋賀県東近江市政所町10

73

TEL&FAX 0748-29105

12

e-mail: akasyobin@eigenji.net



「阿波連家は600年を経ています」
阿波連氏



M・O・H レポート1

〈未来「わたしが創る未来の暮らし」—①〉

同じ島に暮らす 住人として—

押し寄せる問題に、ともに立ち向かう

それぞれに持続可能な社会を目指して活動する7人が、「アジェンダ21研究会うるむい」として、沖縄で最強のタッグを組みました。価値観を共有し、理解し合った7人は、個々の活動の問題点などを互いに投げかけ、さまざまな角度からアプローチし合っています。沖縄で先駆者として歩み続けてきた7人に、これまでの歩みも踏まえておおいに語っていただきました。座談会は「うるむい」のメンバー、照屋久子さんが営む地産地消のレストラン「やさい畑」で行われました。

■喫茶やさい畑／沖縄県南風原町

■2008年5月



いい香りが出迎える「やさい畑」入り口

個々の専門分野や活動の枠を 超え引き寄せられた

司会 「アジェンダ21研究会うるむい」
はどのような活動をされているんですか？

高里 定期的にこのメンバーが集まって、何か活動を行っているというグループではないんです。専門分野が違うので、普段はそれぞれ活動範囲も違うんですが、各人が活動を行っている中で互いに引き寄せられるようになってきたメンバーなんです。大きなきっかけのひとつは、98年にスウェーデンやドイツへみんなで視察に行ったことですね。琉球大学教授の伊波さんがご自身の研究のため、前年にスウェーデンを訪問していたので、北欧民主主義の状況を伊波さんから聞かせてもらうち、「みんなで調査しに行ってみよう」ということになったんです。他にも、海外に視察に行く時は、だいたい一緒に訪問していますね。

伊波 沖縄には環境活動に取り組んでいる人は裾野まで合わせると、本当に

大勢いらっしゃるので、私たちはまさにたまたまつながったという感じでしょうか。環境保護と経済発展の双方を維持することが可能な社会を目指した、スウェーデン発祥の「ナチュラリストアップ」という考え方や、スウェーデンの持続可能な観光などを研究するために、私はスウェーデンに向く機会が多いのですが、このメンバーとはスウェーデンで10日間、「同じ釜の飯を食べた」という強い結びつきを感じていますね。「うるむい」のことを他の人に紹介する時、なかなか一つにくれず、説明するのが難しいんです。こうしてメンバーと会うのは楽しいですよ。やっていることは違いますが、「思い」が同じですからね。

和宇慶 私は土木資材を扱う会社を経営しているんですが、今、何が必要なのか、将来、何が必要なのか。このメンバーの話を聞きながら、世の中の流れをキャッチしているんです。

高里 お互いにいい刺激になりますね。

渡久地 私たちの付き合いは長くて、20年以上も前にさかのぼるんですよ。

沖縄は環境のことを問題視するのが本土よりも早かったですからね。88年に制定された「リゾート法」のもと、沖縄の海岸線にホテルを乱立させる「リゾート沖縄マスタープラン」が策定されたので、90年に「リゾートを考える女性の会」を設立しました。それ以前にも、特に名称などは付けずに活動はしていたんですが。

和宇慶 「うるむい」は沖縄の言葉で、「うる」はサンゴ、「むい」は森、つまり「サンゴの森」ということなんですよ。寺田 ゆるやかなつながりのグループというのがいいんですよ。何かあたら一緒にやるという感じなんです。

高里 95年には、国際連合主催の北京で開催された女性の人權などについて話し合う「第4回世界女性会議」に、沖縄から11のワークシヨップ、71人の女性が参加しました。今日のメンバーの中にもワークシヨップに出席した人もいます。沖縄が抱えている問題を北京へ持っていく、世界中の女性と出会うことで解決のヒントを持ち返ってこようと意気込んでいました。

源 北京会議の10年前、85年にはナイロビで「第3回世界女性会議」が開催されました。私はラジオ局に勤務していたので、ナイロビへ取材に行つて、特別番組を制作したらどうかと社長から提案されていたんです。けど、それだけの放送時間と予算があるなら、その分をす

べて沖縄の女性のために枠をもらつて、女性のネットワークで番組を作らせて欲しいと社長に直談判したんです。結局、12時間の番組を女性だけで構成することができました。
渡久地 「世界女性会議の沖縄版をみんんで立ち上げよう」というないフェスティバル」という環境や平和、男女平等社会などをテーマに掲げた催しを開きました。源さんはこの「うないフェスティバル」の仕掛け人でもあるんですよ。「うない」とは沖縄では女きょうだいのことです。家庭では「うない神」、地域共同体では神女として、女性性は沖縄社会を司ってきたといわれているんです。95年の北京会議へ出席



(教授)、和宇慶氏(事業者)

した時には、既に「うないフェスティバル」で培ってきた10年分のワークシヨップの蓄積があつたというわけなんですよ。
高里 地域からの声を発信するために、「100人のメッセージ」というコーナーを設け、さまざまな分野の女性が登場し、女性から女性へ、一人1分のメッセージを語ってもらつたんです。
渡久地 あれは本当に楽しかったですね。
高里 反響がすごかったんです。病院や市場などにおいても、何か別のことをしながらでも、ラジオなので耳から入ってきますからね。翌年からは選りすぐった男性からのメッセージも取り上げました。選ばれなかった夫の妻たちが「あなた、選ばれてないわよ」と夫に詰め寄つたそうですよ。

伊波 環境問題にしても、平和問題にしても、次の世代につながるものが一番難しく、大きな課題でもあるのですが、「うないフェスティバル」は次の若い世代にうまくつながっていきましたね。
高里 沖縄は地域社会が小さいからスムーズにバトンタッチできたというこ

女性の人権から環境、
マーケティングまで

司会 「うるむい」のメンバーは即かず、

ともあるでしょうけど、次世代へのつながりは重要ですね。



左から、寺田氏(テレビ)、源氏(ラジオ)、高里氏(政治)、渡久地氏(環境)、伊波氏

組は続いていて、今では1200回近く回を重ね、ニュース番組の中の特集コーナーとしては日本一の長寿番組になったんですよ。沖縄県内の川だけでなく、県外やスイス、ドイツなど海外取材にも出掛けました。水の視点から沖縄の環境問題を提起しているんです。

離れず、それでも価値観を共有しているの目指す方向が一緒なんですね。これまでのお話にも出てきましたが、みなさんの専門分野を教えてください。

寺田 テレビ局に勤務していて、81

年から夕方のニュース番組の中で「河川・環境シリーズ」という特集コーナーの制作に携わり、キャスターを務めてきました。27年も番組

91年からはゴミ問題にも踏み込んで、さらに掘り下げてきました。03年に退職した後は、個人的な取材活動を続けています。有機農業で成功したキューバにも取材に行きましたね。それらは機会あるごとにメディアに発表しています。沖縄県内の13の河川保護活動団体の連携を図るために立ち上がった「沖縄玉水ネットワーク」の副代表も務めています。

和宇慶 私も「沖縄玉水ネットワーク」の会員で、「比謝川を再生させる会」の運営委員として携わっています。

渡久地 沖縄はサンゴ礁のリーフが周囲を縁取り、遠浅の地形なんです。だからこそ埋め立てるのも簡単なんです。寺田さんは番組の中で、リーフの大切さを訴え続けてきました。各地の住民運動をバックアップし、元気づけてきたんです。そして、市民が動いたことで、行政を動かしたんですよ。内閣府沖縄総合事務局、沖縄県、建設業などがひとつのテーブルづくまでに至りました。同じく、源さんもメディアの立場で活動してこられました。



「世の流れをキャッチ」和宇慶氏

源 ラジオ局は今年、定年退職しましたが、現在はフリーランスでラジオ番組の制作をしています。これまで平和、沖縄、環境などをテーマに女性の視点で番組を作ってきました。98年から10年間、「うるむい」の活動の一環として、渡久地さんをパーソナリティーに「おしゃべり環境工房」という環境番組の制作もしていました。渡久地さんは環境省の環境カウンセラーで、沖縄では第一号なんです。

ラーがいて、現場の事情がよくわかってるゴミ問題や教育、女性の人權、ヤンバルの森の保護などにそれぞれ関わっていました。その後、どんどんカウンセラーの人数は増えています。照屋さんも市民部門の環境カウンセラーで、ヤンバルの森の保護に取り組んでいますよ。

照屋 ヤンバルとは沖縄本島北部エリアのことで、「山原やんばら」という字の通り、自然豊かな場所です。ヤンバルだけに生息しているノグチゲラやヤンバルクイナなど、多様な生物が生息している貴



「かりゆしウエアもジェンダーの発案」高里氏(左)、「環境とジェンダーと平和はイコール」渡久地氏(右)



「ナチュラルステップに学ぶ」伊波氏

重な森なんです。しかし、現実はい乱開発が進行しています。網の目のように林道が建設され、自然林の森林伐採が進んでいます。自然観察指導員として、子どもたちにヤンバルの森を案内し、豊かな自然が今という状態にあるのか、実際に見てもらおうところから始めています。開発のためには、政府は沖縄だけの高率補助金を投入しますが、それによって大規模な自然破壊が進みます。それに気付かない沖縄の側にも責任があると思いますね。沖縄の人の意識が追いつかないほど、乱開発のスピードが早いです。この20年で、状況はどんどん悪くなっていて、活動していてもいつこうによくなくなる心配



破壊される、やんばるの森

がないので、活動をやめていく人が多いのも事実です。私の場合、「うるむい」のメンバーにいろいろ打ち明けて相談し、みんながわかってくれるのが救いなんです。このメンバーは私が生意気なことを言っても、受け入れてくれるんですよ。

高里 私もヤンバルの森の乱開発に異議申し立てをする「命の森・やんばる訴訟」の原告団の一人です。沖縄の開発は必ず米軍基地とセットになっています。ダム建設で掘った土砂も結局は海の埋

め立てに使用されるんですよ。現在、「基地・軍隊を許さない行動する女たちの会」の代表を務めています。89年から4期15年、那覇市議会議員を務めました。主に、女性、人権、環境問題をライフワークに取り組んできました。伊波さんは那覇市のゼロエミッション推進室の立ち上げにともない、参与として関わってこられたんです。

伊波 当時、引き受けるかどうか、このメンバーに相談にのってもらいました。



「河川・環境シリーズは長寿番組」寺田氏(左)、「うないフェスティバルの仕掛け人」源氏(右)

渡久地 依頼のあった市長は、高里さんが那覇市長選を保革で争った相手でしたからね。けど、環境問題はイデオロギーではありません。那覇市がよくなるのであればと伊波さんの背中を押したんです。

伊波 私の専門は元々マーケティングですが、売るためのマーケティングではなく、研究テーマはコンシューマーリズムです。以前は使い捨てるのが美德で、どんどん使う方がいいことだとすり込まれてきたんですね。作ることや売ることでは企業は利益を得て豊かになってきました。日本全国そうでしたが、特に沖縄ではフェンスの向こうに広がるアメリカ式の大量消費型の



「命の森・やんばるを守る」照屋氏

生活を目の前にし、そこに豊かさを見出していったんですよ。時代は変わり、今や企業も環境に目を向けていかないとビジネスチャンスが失われてしまいます。利益は必ずしも物からだけ生まれるわけではないんです。マーケティングの考え方を変えていかなければいけません。以前は環境問題というと理系の分野でしたが、今は社会系、特に経済や経営分野が取り組んでいかなければいけなくなりましたね。

山積する問題に 立ち向かうには

司会 みなさんから「平和」「環境」「ジェンター」のキーワードが何度も登場しましたが、これらは常に関連があるということですね。

渡久地 環境問題とジェンターはイコールで、さらに平和も加えて、三つがイコールですね。環境問題は昨今取り上げられるようになりましたが、平和問題は以前からありましたよね。特に沖縄ではそうです。そして、平和問題は

寺田麗子

●てらだれい 1949年那覇市牧志生まれ。東洋大学3年次、演劇活動に転向し中退。1973年、沖縄テレビ入社。報道部へ配属。ニュースキャスター、記者、ディレクターを兼任。1988年、「川は訴える」をシリーズでスタート。タイトルを「河川・環境シリーズ」と改め、現在も続く。1982年、日本民間放送連盟テレビ活動部門最高賞受賞。環境関連の番組を多数制作。国土交通省教材ビデオ・沖縄県教材ビデオなど多数手がける。2003年沖縄テレビ退社。

現在／沖縄玉水ネットワーク副代表、沖縄県公共事業評価監視委員、NPO活動支援選定委員、アジェンダ21研究会うるむい会員、沖縄カジノ問題を考える女たちの会会員、沖縄河川整備検討委員、沖縄の水を考える会委員、沖縄の海辺を考える会委員。著書／「川は訴える」（1995・ポータルインク社）、公書研究・沖縄の赤い海

高里鈴代

●たかさと 1940年生まれ。東京都女性相談センターで電話相談員、那覇市婦人相談員を経て1989年〜2004年まで那覇市議会議員を4期15年務め、市議会副議長。女性・人権・環境問題をライ

フワークとする。

現在／基地・軍隊を許さない行動する女たちの会共同代表、強姦救援センター・沖縄代表、ベトナム青葉奨学会沖縄委員会代表、アジェンダ21研究会うるむい会員、介護を考える女性の会会員。

著書／「沖縄の女たち―基地・軍隊と女性の人権」（1996・明石書店、共著）「沖縄はもうたまたまされない」（2000・高文研）。

工イボン功績賞（1996）、土井たか子人権賞（1997）、1000人の女性をノール平和賞へノネット）ノネット。

伊波美智子

●いはみち 琉球大学を卒業後、アメリカに留学。1970年デンバー大学大学院修了（経営学修士）。（財）沖縄経済開発研究所を経て、1973年から琉球大学で教育・研究に携わる。

現在／琉球大学観光産業科学部教授。自然環境によいことが、社会的にも経済的にも利益になる持続可能な発展を可能にするための社会的合意形成が研究課題。

著書／「ゼロエミツション―自然生態系に学ぶ経営思想」「持続可能な社会の構築に関わるマーケティングの課題」「ナチュラル・ステップとスウェーデンの持続可能な観光」など。論文および随筆多数。

女性が関わってきます。難民や売春など完全にジェンダーの問題ですよね。

高里 環境問題に取り組み時にもジェンダーの視点が必要ということなんです。

源 「うないフェスティバル」もジェンダーの視点で環境問題、平和問題を考えてきました。

渡久地 本当に向こうから次から次へと問題が押し寄せて来ますね。逃げるわけにはいかないですからね。

伊波 受けて立つしかないかと。
渡久地 ずっと続けてこられたのは、落ち込まないことだとわかりました。まずは楽しまなければいけませんね。そう思えるようになるまでに時間はかかりましたよ。

伊波 スウェーデンの「ナチュラリス

テップ」を提唱する団体に話を聞き、初めて希望を見出せたような気がします。ようやく楽しくなり始めています。

寺田 私たちは同じ島に暮らしている住人ですからね。共有する物も同じなんです。それが結果的に大きな力にな

っているんだと思いますよ。

渡久地澄子

●とくち すみこ 1936年フィリピン・ダバオ生まれ。東京家政大学、及び清泉女子大学卒。1970年、沖縄大学非常勤講師。1988年、国際ボランティアの会・I・J・A・P・A・N 沖縄代表。1990年、リンクトを考える女性の会アジェンダ21研究会のむい設立、沖縄県女性団体連絡会事務局長。1997、年環境省環境力カウンセラー、バイオ21ちゅら化粧品設立参加、ガールスカウト・リーダートレーナー。

源 啓美

●みなもと ひろみ 1948年沖縄県渡嘉敷村生まれ。1967年、ラジオ沖縄報道部入社。営業部コピーライターを経て制作部。1985年、ラジオ12時間放送と運動した女たちの文化祭「うないフェスティバル」を立ち上げる（現在も毎年開催）。平和・沖縄・環境など女性の視点で番組を制作。1997～2007年10月まで、「アジェンダ21うるむい」の活動の一環として渡久地澄子をパーソナリティに、「おしやべり環境工房」を制作・放送。日本婦人放送者懇談会優秀賞、年間最優秀プロデューサー賞受賞。2008年、定年退職。現在／フリーでラジオ番組制作。

和岸慶光

●わつけ みつこ 1938年沖縄県うるま市生まれ。1957年、県立石川高校卒業。1958年、石川高校図書館司書。1996年、山野高等美容学校卒業。1996年、沖縄ツーリスト入社。1962年、和宇慶材木店総務。1979年、導プランニング設立、会長。現在／比謝川を再生させる会運営委員。沖縄玉水ネットワーク会員。アジェンダ21研究会うるむい会員。

照屋久子

●てるや ひさこ 1952年沖縄県南風原町生まれ。日本自然保護協会、自然観察指導員。環境省環境カウンセラー（市民部門）。沖縄環境ネットワーク世話人。現在は自然食レストラン「やさしい畑」を経営し、食の立場から環境を考えている。



照屋さんのおかあさん、畑にて

沖縄でなくってはならない 企業を目指して



和宇慶 ミツ子

合資会社 導プランニング

環境のことを常に念頭に置いて

「うるむい」のメンバーのひとり、和宇慶ミツ子さんは、長年、合資会社導プランニングの代表として、沖縄の環境に配慮しながら、いかに土木建築資材や環境保全資材を扱っていくか奔走する日々を送ってきました。このほど次世代に経営をバトンタッチし、今後は会長として、さらにアンテナを張りながら、自然を守り、人々の生活を守り、持続可能な社会には何が必要かを突き詰めていきたいと話しています。

■合資会社導プランニング／沖縄県沖縄市、
ビオスの丘／沖縄県うるま市

■2008年5月



しじみが大きく育っている

沖縄の樹に囲まれて森林浴





屋根の上にも緑があるビオスの丘



遊覧船でクルーズ

南北に細長い沖縄本島の中ほど、うるま市の山間に「ビオスの丘」がある。「ビオス」とは「生命」や「命」を意味するギリシャ語で、その名の通り、沖縄のランや洋ランを中心に、亜熱帯の植物や昆虫などが生息する森だ。

園内では散策だけでなく、大きな池を運航する遊覧船に乗ってジャングル探検しながらのクルーズも楽しめる。船からは水辺の樹林帯に着生したランやシダ、水鳥なども観察でき、園全体がフィールドミュージアムのようなものだ。

実はこの大きな池はビオスの丘の園にあたって造られた人工のもの。園内の水系の最も上流に造られた沈砂池を兼ねた水源池で、周辺の雨水などが流れ込んでくる。この池が満水になれば、オーバーフローして隣地のゴルフ場の調整池へ流下していく水系が造られている。

しかし、建設工事開始当初は、赤土や汚濁水が調整池へ流れ込み、トラブルが絶えなかったという。そこで導入されたのが、フィルターの役割を果たす、「テクトン」という透水性の高機能不

織布土木シートだった。ビオスの丘の水源池にテクトンを敷き、細かい赤土の粒子をテクトンでせき止め、汚濁水がろ過されてゴルフ場の調整池へ流れ込んだものを、循環ポンプで再び水源池に戻す仕組みが採られた。

水系環境を改善するのに一役買ったテクトンだが、沖縄で使用されるのはビオスの丘が初めてだった。ここをモデルケースに、沖縄でテクトンの使用が広がっていった。

沖縄に導入され、認知されるに至ったのは導ブランニングの和宇慶ミツ子さんの功績が大きい。

「テクトンと初めて出会ったのは、18年前のアメリカの展示会でした。開発した方と対面することができ、大阪にあった日本総代理店の連絡先だけを走り書きしてくれました。その時はそこを訪ねるようにとだけしか言ってくれませんでした。後で聞けば、私をフォローするようにと根回ししてくれていたようです。沖縄では赤土が海や河川へ流出する問題が大きくなっていたので、これをぜひとも使ってみたく



これがテクトン



屋上緑化の実験中

と思っただけですよ。日本総代理店の担当者と一緒に沖繩じゅうを営業しました。琉球大学で行われた赤土流出を防ぐ実験データも携えてまわりましたね」と和宇慶さんは当時を振り返る。

沖繩では森を切り開いて開発が行われた結果、赤土の土砂が川を下ってサンゴ礁の海へ流れ出していく被害が相次ぎ、平成7年に「沖繩県赤土等流出防止条例」が施行された。時代に呼応して、テクトンの需要も高まっていった。赤土流出の抑制という点で、テクトンは沖繩にとってまさに画期的な素材だった。

テクトンは赤土流出の抑制だけでなく、紫外線遮断効果があるので、雑草の繁茂を抑制したり、ぬかるんだ軟弱な地盤を安定補強させて工事車両の通行を可能にし、原状の回復も容易にするなど、その使い道はまだまだ。

「テクトンは資材だけにとどまらず、いかに応用していくか、可能性は無限大です。ピオスの丘の水源池に敷いたテクトンに魚が卵を産んでいたのを見つけた時は、その環境に根付いたんだ

とわかって、うれしかったですね」と先代から代表職を引き継いだ和宇慶さんは話す。

テクトンだけに限らず、取引先からは「導プランニングに聞けば何でもわかる」といつも頼りにされている。信頼関係で結ばれた輪の中心にいる導プランニング。環境に配慮しながら持続可能な社会には何が必要なのかを見極め、その輪を広げていく役割を担っている。（和宇慶さんのプロフィールは16ページで紹介しています。）



導プランニングのメンバー、勲氏は右から2人目

●鼎談



畑 裕子 (左上)

作家

中井 二三雄 (右上)

『湖国と文化』編集長

森 建司 (右下)

循環型社会システム研究所 代表



〈未来「わたしが創る未来の暮らし」—③〉

人間の普遍とは—

千年を経てなお、燦然と輝く『源氏物語』から

永い時を経て、今も読み継がれる『源氏物語』。壮大な物語を貫く人間の真実の姿は、まさに“普遍”の存在です。作家の畑裕子さんと、季刊誌『湖国と文化』編集長の中井二三雄さんを迎え、作者・紫式部の実像にせまりながら、人間の普遍を支えるものは何か、森代表がお話をうかがいました。

■滋賀会館／大津市

■2008年6月

源氏物語の誕生から千年 紫式部と、その家族愛

森 源氏物語がこの世に生まれ、今年で一〇〇〇年目を迎えるそうですね。今日は畑さんと中井さん、プロのお二人から、いろいろなお話をお聞きしたいと思います。

早速ですが、畑さんは最近著（※『源氏物語の近江を歩く』（サンライズ出版））の中で、紫式部が生きた時代を探るにあたって、この時代の方が、今より良かったじゃないか、と思われることはありませんでしたか？

畑 昔の人から学ぶ点は物凄くあります。紫式部にしても、父親の協力がなければ、源氏物語のような大作は生まれなかったのではないのでしょうか。というのも、紫式部は幼い頃に母親を亡くし、その後、結婚するもわずか数年で夫を喪います。そんな彼女を、父親が何かと精神的・物質的両面から支えていくんです。

紫式部について詳細な資料は無いのですが、『紫式部日記』から推察すると、

彼女は夫を亡くしてからの数年を、鬱々とした精神状態で過ごします。娘時代から、父親や伯父の影響を受けて、執筆をしていましたから、才ある娘のそんな姿を見るのは、父親にはさぞ辛かったでしょう。そこで、父親をはじめ友人らが、彼女に何か読み物を書いてみたらと勧めるんです。それが大変好評で、周囲の支えによって書き続けていくんですね。

森 父親の藤原為時は越前国守に任じられ、紫式部とともに琵琶湖を渡ったことが知られていますね。伯父ということ？

畑 父方の藤原為頼たゐらです。歌人として知られ、『藤原為頼朝臣集』という歌集が遺されています。紫式部は父親から漢学を、伯父から竹取物語や伊勢物語などの物語や和歌を学んだとされます。家族はもちろん、親類縁者が彼女の才能をサポートしていたんですね。そういう意味では、現代の働く女性と共通・共感するところもありますし、学ぶべき点もたくさんあると思いますね。

森 そうですね。これ以上に強い味方はありませんよ。紫式部が石山寺で執筆をしだした頃は、すでに未亡人だったのですか？

畑 諸説あるのですが、研究者のあいだでは、石山寺で紫式部が執筆したという説は認められていないんです。

森 そうなんですか。

畑 ええ、紫式部の名が知られて後に、伝承として広まったのではないかと推測されます。藤原宣孝のぶたかの許に嫁ぎましたが、宣孝も紫式部の才能を認め、彼女が書くことに協力的だったようです。紫式部は、教養ある物語作家としての才を買われ、中宮彰子の女房になったのですから、宮中でも彼女の執筆活動に特別の配慮がありました。

森 世界最古の長編小説とされる壮大なストーリーです。紫式部が万全の態勢で、この大仕事に挑んだのだらうか、と興味が沸くのですが。

畑 想像力を働かす以外にないのですが、推測するに、紫式部の本格的な執筆活動は、夫を失ってからでしょう。幼子もいましたから、乳母や、もちろん父親

の協力が不可欠だったと思います。それと、大切なのは紙の存在です。当時の紙は貴重品でした。父親の為時は、越前国の武生から京の都に戻るとき、地元で奈良時代から生産されていた和紙を、おそらく膨大な量、持ち帰ったのではないのでしょうか。身分の低い貴族ですと、なかなか紙は手に入らなかったでしょうが、そこにも父親の力が働いていたのでは、と思います。

森 なるほど。万全の態勢というより、娘を思う父親の気持ちの方が源氏物語の執筆を強力にサポートしているんですね。

■ 紫式部は、人と情報を 掌握するエキスパート!?

森 これから先、源氏物語を越えるような作品は、おそらく生まれないんじゃないかと思うのですが、だからこそ、これを世に送り出した紫式部の人物像に興味をもちます。中井さんはどう思われますか？

中井 一つは紫式部が貴族であったからこそ、男女の恋愛というテーマが成立

したのでと思います。庶民であれば、恋愛どころじゃなかったでしょうし、特権階級ゆえに、身近に男性の情報が沢山あったでしょう。

それともう一つは、紫式部には人と情報を管理する能力、マネジメント力があつたのではないかと思うのです。

畑 そうですね。マネジメント力という点では、藤原道長が紫式部の強力なスポンサーだったとされますから。後ろ盾を得るのも能力の一つ、彼女の実力といえるかもしれません(笑)。ただし、紫式部はそのような自分、あまり好きでは



なかったようです。

森 なるほど。物語の主人公・光源氏は、誰か具体的なモデルを想定していたのでしょうか？

畑 ええ。源融みなもとのとむら(822～895)とされています。大津市の伊香立南庄に、この人を祀った融神社があります。この源融と、年代的にわずかながら接触しているのが、紫式部の曾祖父である藤原兼輔かみすけ(877～933)です。兼輔は醍醐帝たごの時代に歌人として活躍し、有名な三十六歌仙の一人にもなっています。物語中、光源氏の父帝である桐壺帝は、醍醐帝がモデルとされますから、おそらく伯父から、兼輔の時代の様子を紫式部もよく耳にしていたのではないのでしょうか。

森 何だか家族の歴史というものを感じますね。学者の家系が、見聞した知識を代ごとに順送りしているような。今の時代だって、おじいちゃんの時代はこうでな……、といった語り聞かせが、子どもの創造力を大いに刺激することがあり得るでしょうね。

近江商人の家訓にも、名作古典と同じ”普遍”が

森 少しお話を変えますが、畑さんにとっての紫式部が、私にとっての近江商人であろうと思っんです(笑)。近江商人の家訓を目にするたび感心するのは、達筆と、内容もさることながら、その表現力です。そして、その家訓を丁稚にいたるまで、毎朝繰り返し読んでいたという、これは当時の人たちの教養レベルが高かったということでしょうか。

中井 「門前の小僧」

平安時代から明治時代まで、時を越えて…





「“光と影”に真実がみえる」中井氏

のように、よくわからないけれど、繰り返して教えられるうち、いつか身に付いてくる。そういうものだったんでしょ。繰り返しの効果、教育の成果でしようね。

森 私の世代でいえば教育勸語ですか。

中井 そうですね(笑)。私も近江商人には興味があるのですが、それは「光と影」に分類される、もう一つの側面においてです。北海道の人に聞くと、同じ近江商人でも、名もない墓に眠っている人は大勢いるらしいんです。男所帯で

北海道に渡り、ろくな食事もとらず、事業もうまくいかずで……。 「ニシン御殿」と比べたら、まさに影の部分ですよ。

森 そういうケースもあったでしょうね。滋賀県外で近江商人についてお話をさせていただけると、結構、悪い印象をお持ちの方もありますね。

中井 ああ、差別語もボンボン出てきますよね。近江泥棒、伊勢乞食。

森 そうなんです。ですから私は、近江商人の初代と、二代目、三代目には、隔世の感があったのじゃないかと思うようになりました。苦勞の度合いの違いですね。私自身も今の立場になってやると、企業経営の本を書かせていただいたんです(笑)。家訓も、それを書くという時は、一線を退いた後だったと思うんです。ですからある意味、反省も込めて、ああいう商売をやるんじゃないやなかった、本当はかくあるべきなんだ、というものを書き残したんじゃないでしょうか。
中井 やはり一番は、希望をこめたものでしょうね。それはそれで、商いの哲学を追究しているのですから、不朽であり、普遍であるといえますよ。

人間の真実の姿が、 時代と分野を超える

中井 源氏物語から一〇〇〇年が過ぎて、いまや小説も、携帯電話やインターネットで一斉送信の時代です。時間も距離も関係ありません。源氏物語のように、夜はまったくの暗闇の世界、印刷技術は無しという時代背景は求めようがありませんね。

森 風俗の変化は当然ですが、情景の描写など、大きく影響するでしょうね。大切なのは、時代の「良いところ」だけだと思ってしまうのですが、そう上手くいくばかりでもない……。

畑 確かにそうでしょうね。けれども、美醜を含めた普遍性というものがあると思うんです。時代を超えて人間の心を打つものは、やはり人間の真実の姿です。そして、人間の真実というものには時代を経ても、そう変わらないと思います。文学の世界でも、近江商人の商いの世界でも同じです。小説の中で人間を追究する、人間らしい商いを追究する、それぞれ得られる真実というのは、



「真実の中に永遠は宿る」畑氏

畑氏 南極の水や、ホット
キョクグマの生存と騒
いでみせても、大半の日
本人にとっては自分や
家族のことではない。
対岸の火事にしか聞こ
えないですよ。そこら
へんの想像力をもっと

どこかで結びつくものだと思います。
中井 私も同感です。真実を追究する
という点で、古今東西の世界も一緒
じゃないですか。
畑 トップの人間に、真実を追究する
気持ちがあれば、三方よしのビジネス
にもなるでしょうし、目先に囚われ、
遠くを見ることができなければ、先ほ
どの近江泥棒的な商売作法になります。
小説の場合も、ただ売れるからといっ
て、何を書いてもいいのかというこ
や、やはり一時はもて囃されるかもしれま
せんが、永遠の文学としては残ってい
かないと思うんです。
中井 ただのエンターテイメントだけ
では、ダメだと思います。それをわかっ

ていて、楽しい形で真実を追求するの
が「プロ」でしょうね。
森 本当にそうですね。どの分野でも、
それがプロの境目になるでしょう。

未来へと続く ”普遍”を支えるのは……

中井 例えば政治家。地球温暖化スト
ップと言うなら、もっと身近な、我々
ができることから言うべきです。

森 私もそれは思います。最後に地球
環境のお話になりましたが(笑)、どう
も環境問題を綺麗な言葉でくるもうと
している。でも、それでは、待ったなし
とされる状況を正確に伝えていないと
思います。

働かせて、極端に言えば、日本の総人口
1億3千万通りの説得材料、啓蒙活動
が必要なわけですから。その中で最大
の共通項を探る努力が必要じゃないで
しょうか。

森 畑さんは地球環境という視点で、
今の社会をどうお感じになりますか。

畑 確かに危機感、もどかしさはありません。
しかし、人間は神様ではありません
から、死ぬまで成長するものだという目
で見たいんです。だから、他人にも自分
にも絶望するのはちよっとお待ちなさ
いと。死ぬ間際には、今の自分で良かつ
たと、そんな人間でありたいですから。

「永遠は未来へ導く」森氏



そのためには許すことも大事だし、極め付けないことも大事。何より恐ろしいのは無知です。学ぶことによって、世界は広がり、変わって行くのだと思います。私自身も恥ずかしいことが多いのですが、地球温暖化で沈みゆく、南太平洋上のツバル島の人々のことを聞いたとき、胸を突かれ、人ごととは思えませんでした。

森 未来に続かないということが、現実には起きようとしているんですね。

この社会を未来へ導くものは、人間の理性や知恵、思いやりの心など、そういったたくさんのものだと思います。そしてそれらこそ、人間の普遍性だと、私は信じます。

中井 その普遍を支えるために、見極めることや学ぶことだと思えますよ。私たち三人とも分野の違う人間ですが、これを忘れちゃいけないですよ。社会のすべての人もです。

森 今日は文学から環境まで、よもやま話的になりましたが（笑）、お二人ともありがとうございます。



酔生夢死
中井こま子

● なかい ふみお 1949年守山市生まれ。広告・出版・映像関係の仕事を経て、1976年から著述業。滋賀県文化振興事業団発行「湖国と文化」編集長。大津市在住。

どんな時も
人間と愛する

畑裕子

● はた ゆうこ 1948年京都府生まれ。奈良女子大学文学部国文科卒業。京都で国語教師を勤める。その後、滋賀県に転居。1993年・第5回朝日新人文学賞受賞、1994年・第14回地上文学賞受賞、滋賀県文化奨励賞受賞。

主な著書／「画・変幻」「近江百人一首を歩く」「椰子の家」「近江戦国の女たち」「源氏物語の近江を歩く」など。日本ペンクラブ会員。

勇気凛々

いの壁を打ち破れ

森建司

● もり けんじ 1936年滋賀生まれ。滋賀県立長浜北高校卒業。新江州（株）代表取締役会長。滋賀経済同友会特別幹事、滋賀経済産業協会副会長など。

著書／「吃音はなある」遊タイム出版、「循環型社会入門」新風舎「中小企業にしかできない持続可能型社会の企業経営」サンライズ出版。

ふれあい

第十回

『お兄ちゃんはペンギン?』

中井 二三雄



「ただいま〜。あ〜、暑かった」
妹は、学校から帰るなり、すぐに
冷蔵庫を開けました。

「アレ? ない。お兄ちゃん、わた
しのアイスクリーム知らない?」

「知らない……」
「おかしいな、確かにここに置いと
いたのに……。どこにいったかな。
ほんとうにない、ない。大好きなメ
ロンアイスが。ウエーン」

兄はついに重い口を、申し訳なさ
そうに開きました。

「そつうえば、さっきペンギンが食
べてたよ」

「えっ! ペンギンが?」

「南極を散歩中、小さな穴があった
のでのぞいたら、おいしそうなアイ
スを発見したんだって。大喜びだっ
たよ」

「ほんとう? ペンギンちゃん、ペ
ンギンちゃん。どこにいるの!」と、
妹は必死になって、大好きなアイス
よりもペンギンを探します。

でも、冷蔵庫の中にいるはずはあ
りません。

その様子を見たお母さんは、兄の
耳をギユと引っ張って、そつと冷た
く言いました。

「お兄ちゃんペンギン、おいしかっ
た?」

便利をスコシ捨てる 何かをタクサン得られる！



藤村 靖之

発明起業塾 塾長、発明家（工学博士）

電気がなくても快適・便利は ホドホド実現できる

電気に頼らない電化製品を開発している発明家の藤村靖之さん。「エネルギーと食料はグローバル化ではなくローカル化がいい。」との持論を“非電化”というキーワードで実践しています。生活に必要な電気を日曜大工であなたのお庭で発電できることご存知でしたか？

6月11日滋賀ビルにて「EEネット記念大講演会」が開催されました。参加者80名。「循環型社会の実現を目指して」のテーマで、琵琶湖環境科学研究センター長内藤正明先生、発明起業塾長藤村靖之先生、新江州株式会社森建司会長の講演もありました。

■滋賀ビル

■2008年6月

□非電化生活のスヌメ

栃木県那須高原に自宅兼アトリエがあります。広い場所ですいろいろな面白いことを準備しています。

たとえば最近、オール非電化住宅とこのを建て始めました。オール電化住宅というのがあまりにも流行っているのです、少しからかってみたくなったのです。テレビとパソコンと夜の照明以外は電氣を使わない設計です。

パソコンとテレビと夜の照明以外は電氣を使わないと、一日の電力消費量が二キロワット程度、普通の家庭の十分の一以下に収まります。それくらいなら何をしても発電できてしまいます。

オール電化住宅とは、調理は電磁調理器で、給湯は電氣温水器で、暖房は電氣暖房でやることを言います。主にガスと石油が担っていた部分です。これは原発換算で六十八基分のエネルギー量になります。

つまり日本中がオール電化住宅になると単純計算で電力需要が原発六十八基分増える。その増えた電力を一〇〇

%原発でまかなおうというのがいまだ本で進められている方向なんです。そうすると単純計算では原発が六十八基増えてしまう。しかも、オール電化住宅の推進のスピードは急激です。今から六年前では新築注文建築の十一%がオール電化住宅でした。三年前で二十六%、一番最近のデータでは、新築注文建築の半数以上がオール電化住宅です。これほど急激な電化製品の普及率は過去には携帯電話以外では見られません。

オール電化住宅を建てた人の理由は「電磁調理器の方がちよつと安全だつて聞いたよ」とか「ちよつと融資が受けやすい」とか「深夜電力は使えば使うほど割安になるんだ」というものです。そんなささやかな理由でオール電化住宅になだれうっている。

これから家を建てるときにオール電化住宅が選択肢に入っておられる方は、少し考えてください。本当にオール電化住宅しか答えがないのでしょうか。

□日曜大工でできる風力発電

非電化住宅とともに、自然の力を利用した風力発電システムも作っています。

敷地内の高台に四メートルのガラスのピラミッドに高さ二〇メートルの煙突を立てます。下向きにも坂にそつて一〇の煙突を作ります。昼間太陽が当たるとピラミッド内が熱くなります。そして熱い空気が煙突の中を上昇します。ストープと煙突の関係と同じです。エネルギーが大きければ大きいほど煙突が高ければ高いほど煙突の中の風速は早くなります。秒速一〇メートルくらいの風を作るのはそれほど難しくありません。秒速一〇メートルの風が常時吹くのでここに風車を入れておくと風力発電ができます。ここまでは大して面白くありません。しかも太陽はあまり効率のよくないエネルギーです。せっかく設備を作つても、太陽は全国平均で年間一二七〇時間、私の住んでいる那須では、一年に千時間くらいしか照りません。それも東から出て南に行つて西に沈んでじつと落ちていってはいけません。面白いのはむしろ夜です。那須では、一年に四千時間はほしの見える夜です。



那須のアトリエ



非電化冷蔵庫



非電化除湿機



モンゴルに設置した非電化冷蔵庫

夜になりピラミッドの中の空気が放射冷却の原理で冷えると、下向きの対流が起きます。煙突効果の逆です。設計を上手にすれば煙突の中の下向きの風を秒速一〇メートルくらいにできます。年間四千時間が星の見える夜です。四方八方空ですから、太陽よりもはるか大きなエネルギーが得られます。昼間は太陽熱を約千時間、夜は放射冷却で四千時間、一年間で合計五千時間の発電をしてみようというわけです。

これはたかが一〇〇ワットしか発電できません。しかし、日曜大工で発電できるのです。

私ではできればエネルギーと食料はグローバル化しないほうがいい、地方で自立したほうがいいとの意見の持ち主です。これらの取り組みの面白いところは、日曜大工でもできるところ、発展途上国が自力でもできるところです。

セネガルに 非電力発電システムを

アフリカのセネガルで進めている風

力発電のプロジェクトがあります。

高さ千メートルの山の中腹に一平方キロメートルのガラスで覆われた平面をつくります。昼間は約一ギガワットの太陽熱が注ぎ込まれます。そして夜は放射冷却が起こります。上向きに五〇〇メートルの煙突、この場合の煙突というのは山の斜面を掘って溝を作つてふたをした煙突です。お金はかかりません。下向きにも五〇〇メートル溝を掘つてふたをします。昼間は五万キロワット、夜は三万キロワットの発電ができます。

セネガルはほとんどが砂漠です。昼は太陽が夜は星が輝いています。一年間で約七千時間発電できます。

これ一つで首都ダカールのほぼ半分の電力をまかなえます。二つ作るとダカールの電力を全てまかなうことができます。建設費用は、同じ規模の電力を生み出すほかの発電設備に比べて二〇〇分の一以下と推定されます。環境汚染もありません。

原発をひとつ作れば三千五百億円の建設費と、とてつもない維持費がかか

ります。つまり大きな経済が生まれます。今までは経済が生まれる方法しか選んできませんでした。そろそろ、経済は大きくならないが、先進国なしでも発展途上国が自力のできるシステムを選択肢に入れても良い時期に来たのではないのでしょうか。

やればできるじゃないかということを那須でいろいろ面白おかしくやって、みなさんに見に来てもらって、選択肢を広げてから、もう一度選びなおしてもらえたらいいと考えています。

〇〇〇〇倶楽部の会員募集中

お米の粉の話です。粉摺り倶楽部は入会金・会員費は無料、退会自由です。

会員になると非電化粉摺り機と非電化粉貯蔵庫をほぼ原価で(約一万円を想定して開発中)購入できます。天日干した高級な粉つき米を農家の方から直接安価で手に入れることができます。価格は白米換算一キログラム当たり二四〇円です。現在日本全国平均一キログラム当たり白米換算で四一〇円



熱心に聞き入る参加者

くらいですからほぼ半額になります。ただし一俵単位で七月までに予約しなければなりません。

現在みなさんが手にしているお米は、流通初期の段階で籾摺りをしてしまいます。そして一年にわたり巨大な低温貯蔵用冷蔵庫で保存されます。つまりお米は巨大電気冷蔵庫で一年間保存され、全国へトラックで運ばれ、家庭では電気炊飯器で炊かれる。

このエネルギー消費量はどれくらいなのでしょう。

低温貯蔵のために原発換算で一・二基分、電気炊飯器のために二・四基分、その他を足すと原発換算四基分の電力がお米にまつわって消費されています。その分、お米の価格も高いのです。

原発四基分の電力とはとても大きな規模です。日本の全電力消費量は原発換算で二〇二基分に相当します。もちろん原発で全ての電力をまかなっているわけではありません。日本には現在五十五基の原発があります。

籾摺りクラブの会員は、できれば天日干し作業を農家で手伝い、杵つき米を

〈未来—④〉

一俵単位で譲ってもらおう。一俵は日本人のお米消費量の一年分に相当します。糊の状態では保存するために、湿度を完璧に調整する非電化糊貯蔵庫が必要で、す糊摺りは非電化糊摺機で行います。そしてご飯を炊くのは電気炊飯器ではなくガスコンロで圧力鍋を使ってもう。電気炊飯器に較べて十分の一以下のエネルギー消費量で済みます。多くの方が圧力鍋でお米を炊いた方がおいしいと言っています。それから遠い地域のお米を買うのではなく、住んでいる場所に近い農家で天日干しする日に手伝いに行つてついでにもらつてくる。

現在の初期段階で糊摺りしたお米はいくら巨大な電力を使って低温貯蔵しても月日が経つにつれ酸化しますますになります。非電化貯蔵庫と非電化糊摺り機を使って糊の状態では保存すると酸化も防げるし虫も寄ってきません。このようなお米との付き合い方を私は「非電化ご飯」と名づけました。

仮に日本中が非電化ご飯にしたら原発四基分の電力を減らすことができます。おいしくて健康によくくて安いお米

ができます。

日本中が、経済を大きくする方向にしか選択肢を選んでこなかったということが、お米からも見えてきます。経費をかけて高いものを作ると支出が多くなり、収入も多くなければなりません。こういうシステムをみんなであつくりあげてきたわけです。

経済は大きくならないが、環境はよくなることを、お米からやってみようと糊摺り倶楽部を始めました。

非電化糊摺り機も非電化糊貯蔵庫も中小製造業の方に利益を出して作ってもらいます。あまり大儲けはできませんが絶対に損はさせません。

もちろん中小製造業の多くは余裕が無く、目先のことで精一杯だということは分かります。しかしそれが唯一の選択肢ではありません。時間的精神的スペースを一〇%くらい、売り上げを少し落とすなどして作つて、新しいパラダイムで消費者の方と新しいムーブメントを起こしていくNPO的ものづくりをやってみるのも、中小製造業のこれらの生き方の一つではないでしょうか。

● かしむら やすゆき 1944年生まれ。
発明起業塾主宰。機械メーカーで製品開発に携わった後発明家に。インド・中国を旅行中、経済成長盛んなこれらの国で電化製品がさまざまの勢いで普及しているのを目の当たりにし、地球環境への深刻な影響を考へるようになり、2000年以降、電気に関心し、電化製品の発明に着手。
現在は那須に自宅兼アトリエを持ち、非電化住宅の建設をすすめている。
自然の力を利用し電気を使わない冷房システムや掃除機、冷蔵庫、除湿機などを発明。充分な性能、使い勝手がよいこと、環境に負担をかけないなどの条件を満たした製品化されている。

便利をスゴシ
捨てる
何かが
得られる！
08.06.11
村崎之

農業”新“世代



前田 壯一郎

野良師

未来へ続く暮らしを手に入れる

今、帰農する若者が、増えていると言われます。滋賀県の最北に位置する余呉町で、5町5反の田んぼをつくる前田壯一郎さん(31)もその一人です。滋賀県立大学の第一期生で、名古屋出身の都会っ子。十代の終わりまで、農業とは無縁でした。なぜ、農業や農村の暮らしに飛び込んだのか? お話を聞きながら、今、現在の若い世代の生き方や働き方の“ものさし”を探ってみました。

■ウッディパル余呉／余呉町中之郷

■2008年6月



ちょっと伸びすぎた稲苗

十代の終わりからの経験が
”そもそも”に

大学1年生の夏休み、長野県の高原野菜農家で住込みのアルバイトをしたことが、前田さんの農業初体験だった。

「農家のおじさんの人柄や、バイト仲間にも恵まれて、普通のアルバイトに比べるとお金も良かった(笑)。単純に農業って楽しいなど、そういう仕事があることを知るきっかけになりました」

もともと自然が好きで、県大の環境科学部に進学したのは、高度経済成長の影で拡大した公害問題に関心を持ち、生活環境の被害を解決する手段を学ぶためだった。

「大学ではカヌー部に入部して、他にも山登りや、滋賀県の自然を満喫しました。専門的な知識と、自分なりの自然体験が増えるうち、漠然とですが、最終的には人の暮らしが変わらなければ、社会も変わらないし、環境も変わらないと思うにいたしました」

大学生活4年目を迎え、進路で悩んでいた時、モンゴル・フブスグル湖の

水質調査を行うエコツアーに参加したことが、一つの転機になった。琵琶湖の4倍近い面積を誇る湖。果てしなく続く草原。大陸感を感じるとともに、モンゴルの人たちの生活にふれたことで、視野が広がった。

「一番心に残ったのは、子どもたちの瞳の綺麗さと、自然体でたくましい生き方。僕らをもてなすために、家畜のヤギを一匹、さばいてくれたのですが、さばき方も独特で、血の一滴も無駄にしません。野菜類が乏しい食料事情なので、ヤギの血は貴重なミネラル分というのがあります。彼らの言葉で表現すると、『大地を血で汚さない』ということなんです。素朴な教えに根ざした彼らの感覚が、僕にとっては物凄く新鮮で、またショックでもありました」

自分の暮らし方を、
社会との接点に

この経験を境に、自分の生き方について、深く意識するようになり、大学院に進んだものの、そこでの研究に興味

が持てなくなりました。

「水質だとかプランクトンの研究が、少しも面白くなくなってしまう。研究の成果を知識として語ることができても、それで誰かに影響を及ぼすことができないのか。結局、身近な人にさえ何も伝えることができないんじゃないかと、僕自身、納得がいかなかった。そこで、『最終的には人の暮らしのあり方』だと、漠然としていた自分なりの考えの、焦点を合わすことと向き合った。

「システムや知識が人の暮らし方を変えるのではないと思うんです。それよりも自分の暮らしが変わって、それを僕自身が楽しむことで、言葉にも説得力が出て、まわりの人に何かを伝えることができるのではないかと思いました」

自分でできて、日本の風土に似合った暮らし方。そして、世代間で順送りできるような暮らし方を自分が実践しようと思った。

「その中で、生計の柱になるような仕事を探すうち、彦根市内の農業法人に目がとまりました。コンタクトをとった



「この田植え機も町内で調達しました」

ところ、研修生という形で就職するところが決まり、大学院は1年で中退することにしました」

余呉町との縁と、 転がるようなスタート

農業法人への就職から3年が経過して、農業のいろはを、ひと通り経験した頃、自分がやりたい農業を思い描くようになった。

「農業を通じて自分はこんなことがやりたいとか、どういう土地でなら、僕でも農業ができるだろうとか、いろいろな思いを培い始めました。でも、それをまわりに話したのは5年目が過ぎた頃です」

思いを口にしますと、「何か自分の力とは関係ないところで先が決まっていた」そうだ。たまたま、大学時代の友人が余呉町に在住していた。その友人が懇意にしていた同じ町内の「米も育

てる大工」こと、清水陽介さん（※本誌17号で掲載。湖北職人村構想・上山田どっぼ村の発起人）と知り合い、余呉町にささやかだが縁ができた。

「その縁づたいに、田んぼを手放したがつている農家のご主人と出会わせてもらったんです」

歳をとって、しんどくなってきたから、1町5反の田んぼを誰かに任せたいというのが、ご主人の意向だった。それに対し、前田さんはもう少し、こじんまりとしたイメージを描いていた。

「水が綺麗なところで、家があつて、そこに住んで、アルバイトをしながらでも、少しずつ田んぼの規模を広げていければいいなと思っていました。」

だから、1町5反と聞いて、本当に悩みました。農耕機なしに何とかできる規模ではないし、いきなりやれるんだろうか。でも、最初からこういうお話をいただくのは、幸運なことですから。お受けしなくては、もったいないと考え、一晩たつて『やらせていただきます』と返事しました」

友人の協力で、上丹生の集落に空き

家も見つかり、その年の暮れ、農業法人を退職することに決めた。年が明けた2005年、雪の多い1月と2月は、旅とサトウキビ畑でのアルバイトに費やし、田んぼの一年が始まる3月に、いよいよ余呉町の新たな住民となった。「本当に、転がるようなスタートでした(笑)」

21世紀の農業青年は、 インターネットが強い味方

1町5反の田んぼづくりと一緒に始めたのが、インターネットを使った情報の発信だ。このインターネットが、田舎であればあるほど、威力を発揮するといえそう。

「お米を販売するツールとしてもそうですが、田舎暮らしにはなくてはならないものだと、あらためて実感しています」。自身のホームページ(『田んぼ舎』)やブログで、新しいつながりを見つける中、自分の田んぼに人を呼ぶことを考えついた。

「お米を食べてもらうことや、僕のし

ていることに興味を持ってもらうこと、つながるためには、まず米づくりと暮らしの現場に来てもらうことが一番だと思っただけです」

そこで立ち上げたのが「よちよちフアーム」プロジェクトだ。友人・知人を募り、なるべく手作業で、とにかく自分たちで米を作ることをめざした。プロジェクトは翌年、翌々年と更新され、ネットやクチコミを通じて、米づくりの仲間も、東京、名古屋、京都、大阪へと広がっていった。

「田植えや稲刈りなど、集まって作業するイベント日は限られていても、経験や思い出は持ち帰ってもらえます。食卓で、米づくりの現場や、仲間の顔を思い浮かべながら、お米を食べてもらえれば、本当の意味での食の安全・安心につながるのではないのでしょうか。知識や言葉だけじゃない、実際を知ってもらうきっかけになればと思っています」

農業は自然相手だからこそ、思ったとおりにならないことも多い。それに加え、大勢の人に集まってもらうイベント前は、天候等を考慮した日程調整に

も気を使うし、食事や寝床の手配など田んぼ仕事以外の準備にも追われる。

「イベントの仕掛けを考えたり、それで僕の生活にもメリハリがつくから、大変なばかりじゃないんです。それと、生まれて初めて田んぼに入る参加者を見ると、僕自身、初心にかえる思いがします。新しい発見を教えるもらうことも多くて、お互いに刺激があるんです」

昨年から彦根市のNPO法人「五環生活」と共同開催のスタイルにあらため、スタッフの数が増えるとともに、ネットワークも一段と広がった。今年、6月21、22日に開催した「五環生活×野良師」の草取り合宿では、『平農半X』の生き方を提唱・実践し、同名の一連の著書が話題を呼んでいる塩見直紀さん(京都府綾部市在住)を余呉町に招き、昼は一緒に田んぼの草取りをし、夜は、静かに語らうひと時を得た。ちなみに、野良師とは前田さんが自称する肩書きだ。野に手入れをし、より良い状態を作っていく、そんな思いが込められている。



楽しいコンサートで会場が盛り上がった

”新しいこと”、”新しい人”が、 町に根をはっていく

こうした”新しいこと”が、地元・余呉町にも根をはりつつある。昨年7月に開催した音楽イベント「木間暮れ祭」は町の人たちに向けて、同じ土地で暮らす喜びや楽しさを育もうと、ウッドパル余呉に勤務する前川和彦さん(35)らと企画した。これまでの仲間内から対象を広げたことで、二人とも「失敗したらどうしようか」とヒヤヒヤしたそうだが、結果は大盛況だった。この木間暮れ祭は、多賀町有志との共同開催で、今後は毎年、開催場所を交互に移しながら続ける予定だ。ちなみに今年9月27日に、多賀町の高取山ふれあい公園での開催が決定している。

これまで、前田さんの存在は、いくつものメディアで取り上げられてきた。経歴もさることながら、冬場は隣の木之本町にある富田酒造の杜氏として働き、仕込みに使う酒米(一部)を、自身の田んぼで作らせてもらうようになったことなど、話題には事欠かない。

そんな、”新しい人”のことを、地元の人たちはどう捉えているのだろうか。前川さんに聞いてみた。

「余呉町は基本的には閉鎖的な空間で、その中で物事が決まり、営まれるというところがあつたと思います。でも、前田君がやってきたことで、いろんな人が町に入ってくるようになり、いろんな目が町に向けられるようになった。それで町の人の考え方も変わってきたというか、慣れてきたというか…。新しいものや異なるものを受け入れる気持ちになったというのは、あると思うんです」

余呉町に移り住んだ当初、地元では「何やる?」と、決して歓迎ムードばかりではなかった。しかし近頃では、「ご近所さんがお裾分けしてくれる野菜が、一人暮らしの冷蔵庫を占領しかねないほどだ。田んぼのことでは、「もつとしっかりせなアカン」と、叱ってくれる人もいる。

「よそ者を、よく受け入れてもらえたと思います。余呉町に来て僕が感じたのは、例えば都会でだったら、学歴や肩書きで相手を見るといいう空気があり

ます。でも、ここでは素直に僕という個人を見てくれている。よく田舎の人は、根掘り葉掘り聞きたがるとか、田舎にプライベートはないとかいう声を聞きますが、それは相手のことをよく知ろうとしてくれているから。いろいろと話すことで、自分をわかってもらえたかな、という気になり、相手にも『あなたはこの子なんやね』と言ってもらえる。そういう関係を築きあえたら、すぐに仲良くなれると思います」

いつかニワトリやヤギを飼う夢も

今後の目標は、まずは「米づくりをしつかりする」ことだが、ニワトリやヤギ、牛や馬など、動物を飼ってみたいという夢もある。

「まだきちんと、会社などの組織化はできませんが、一緒に動物を飼ってみたいという人が近くにいれば、仲間になりましょう（笑）」

前田さんの田んぼに集まる人たちを見てみると、前川さんは「人にはもの

を作りたいという願望がある」ことを強く感じるそうだ。

「彼が楽しそうにやってるから、皆が寄ってくるのかもしれないが。とにかく彼の登場で、町内の若い子たちも刺激を受けているのは確かなんです」

その点では、前田さん、前川さんともども、町のこれからを楽しみにしている。

「僕はここで、自分がやれることをやるうと思っっているだけ」



ウッディバル余呉にて、右が前川さん

その言葉どおり、前田さんはこれからも、余呉町の大地に足をつけて、暮らしていくだろう。今年も実りの秋に向けて、暑い夏がやって来る。

ぼちぼち

野良師

前田 壯一郎

● ました そういちろう 1977年、名古屋生まれ。1995年、滋賀県立大学環境科学部に入学。2000年、同大学院を中退し、彦根市内の農業法人に入社。2005年、独立して余呉町に移り住み、田んぼづくりを始める。現在、耕地面積は5町5反。夏場はカヌーのインストラクター、冬場は酒蔵の杜氏としても働く。
HP「田んぼ舎たんぼや」
<http://tanbo.biz>

● NPO法人「五環生活」
<http://gokan-seikatsu.jp/>

● 木間暮れ祭「ハッピー・フォレスト・プロジェクト2008」INTAG A
<http://www.h-f-p.net/>

端材は創造のおもちゃ箱

— 端材工房 —



こころやすらぐ、香りどぬくもり

無垢の木で作られたネジとボルトをご覧になったことがおありだろうか。それも、直径二センチを超える大きなものを。手で触れてみると、木に彫られた螺旋は金属に刻まれたそれとちがいで、柔らかな暖かみを掌に伝えてくれる。ネジは精密に彫られており、木のボルトを実にスムーズにネジの端から端へとねじ込むことが出来る。その時、時折聞こえる木と木がこすれ合う音も、耳に心地良い。

そうして、改めて眺めてみると、これは実に奇妙なものであることに気付く。

この木のネジは、機能性以外のものを一切求めない普通のネジの形を完全に模しているにも拘わらず、ネジが当然備えている機能が全く備わっていないからだ。無垢の木ネジがもつこの矛盾が、ある種のユーモアになって、これを

見る者を思わず微笑ませてしまう。

この木のネジのもうひとつの特徴は、これが木材の切れ端から作られたものであるということ。こういった端材を活用した玩具を作っているのが、今回取材した「端材工房」だ。滋賀県大津市にある三和総合設計という建築設計に携わる会社の中に作られたこの工房は、捨てられるはずの端材を加工し、玩具や生活小物へと生まれ変わらせている。

端材を用いて作られたグッズは主にそこで販売されているが、その他にも各地のイベントを利用して出張販売も行っており、そこでも端材工房の作品を手に入れることが出来る。今回の取材は、京都の知恩寺で五月十五日に開催された手作り市に出店した際に行われた。

午前九時、知恩寺の境内は三百を超える店とそこに訪れる人で、すでに賑やかな喧噪に満ちていた。木工細工をずらりと並べた店構えが、食べ物や衣類を扱う店との差異を際立たせているため、思わず気になって店を覗き込みたくなってしまう。その日は境内の南東の塀側に、端材工房が出店していた。

店番をしていたのは、岩波真莉子さん。商品の温かな木のぬくもりに常に触れているからだろうか、柔和で気さくな応対をして下さる女性だ。工房の母体である三和総合設計の社長の娘であると同時に、端材工房の顔としてその製造や営業を取り仕切る。

店先には先ほどの木のネジの他にも、バリエーションに富んだ品が並んでいる。どっしりした重量感のテーパーカッター、動物の顔の形をしたカスターネット、優しくカーブした輪郭のミニカーにサイコロ。その他にも沢山、木の滑らかで柔らかな質感を活かした製品がディスプレイされている。

それらを見てすぐに気がつくのは、同じグッズでも色や表面の感触が微妙に、あるいは大いに異なっているということ。そのことを岩波さんに質問すると、「端材工房で使う木材の種類は、国産のもので六十種類ほどあります。もちろん単に端材を使っているのですから、使えるものは全部使っているに過ぎません。ですが普段は意識されにくい木材にも、沢山の種類があり、それぞれ

違った性質をもっていることを多くの方に知ってもらいたい、という意味もあります」という答えが。

その思いは製品に反映されている。例えば、積み木といった複数のパーツで構成された製品の中には、部品のの一つ一つに、その木の名前が焼き印を使い記されている。樫や栗といった馴染みのある名前があれば、榎や鼠子のような変わった名前のももある。木材一つをとってみても、私達が普段どれほどそれに意識を払っていないことか。

今、いち押しの商品は何かと聞いてみたところ、岩波さんが指し示したのはモザイク状の板：ではなく、どうやらパズルの一種。ヘキサミノパズルという、鉤や十字の形をしたピースが枠の中にきっちり納められたもので、遊ぶときはそれぞれのピースを外し、もとの通りにまたはめ込むのだという。

「他にもパズルを作っていますが、これはかなり難しいものです。パズルで遊ぶほかに、お部屋のインテリアにもどうぞ」

新商品を次々、作り出している。それを聞いて一度ならず、何度も足を運



岩波さんと端材のおもちゃたち

んでそれらを見たいと言う気持ちに駆られる。端材という不要物から生まれた不思議で温かみのある品々に、どうやら魅了されてしまったらしい。皆さんも一度、ご覧あれ。

●端材工房

滋賀県大津市滋賀里4-11-3 三和総合設計内

TEL / 077-526-4097

FAX / 077-528-5460

端材工房はグッズの販売の他、毎月第二日曜日には気軽に木工を楽しめる「じがさ」端材工房を開催。

また知恩寺の手作り市の他、各地の出店予定は端材工房のブログ

「手作り木のおもちゃブログ」
http://blog.livedoor.jp/hazai_kobo/
で知ることが出来る。



土壁を仕上げる左官職人

地域の技術と つながる住まい

清水 安治

湖北古民家再生ネットワーク 安曇川流域・森と家づくりの会

「このごろは、マンションやプレハブ住宅の内装工事がばっかししてる」とため息をつく大工職人。あるいは「土壁を付ける家が、ほんまに少のーなった」と嘆く左官職人の声を聞くことが多い。

今や、地域の建築技術は危機に見舞われているのか。それとも、明るい未来はあるのか。



■ 古民家に込められた ワザ

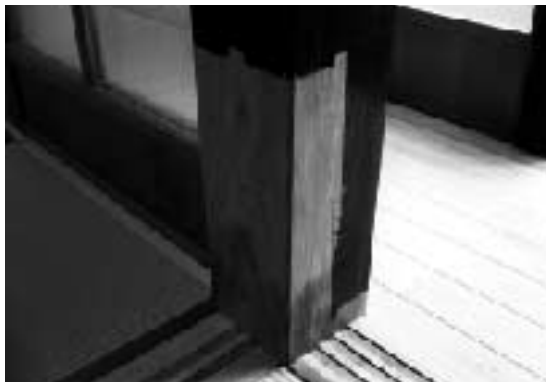
滋賀県の湖北地方には、余呉型、あるいは伊香造りと呼ばれる民家をはじめ、今も多くの古民家が住み継がれている。この古民家の再生に携わっていると、地域に連綿と受け継がれてきた巧みな建築技術に巡り会うことができる。大工の技術をはじめ、左官の技術、屋根葺きの技術などに地域ならではの特徴を見つめることは案外にたやすい。

ほぞ穴を刻む大工職人

たとえば、雪深い冬のなわいを支え、この地に伝わるオコナイと呼ばれる神事を当屋として執り行うためであったらるう室内は、かなり広く、懐が深い。その柱や梁の木組みは重厚であり、美しい。また、普通は割竹を下地材とすること



平ほぞに差し込まれた鼻栓



傷んだ柱の根継

が多い土壁は、琵琶湖岸の集落では近くに豊富に生えているヨシを束ねて使われているのを見つけて驚くとともに、納得した。あるいは、琵琶湖岸から離れた山麓の雪深い地域の茅葺き屋根は、湖岸のそれと比べて明らかに急勾配であり、集落の景観が尖っている。湖岸の雪も少なく風当たりが強い地域の緩やかな屋根勾配がつくる穏やかな集落景観との対比に、それぞれの地域の技術の違いが現れて見える。

これらは、いずれも地域に根付いた伝統が成せるワザであり、永い年月をかけて守り受け継がれてきた。

■今の時代に技術を生かす意味

地域の建築技術は、その周辺の地形や気候、文化など地域がもたらす様々な制約や恩恵、約束事などと密接に関係しながら育まれてきた。しかし、建築工法や材料がグローバル化し、車や家電製品などと同じように、メーカーのカatalogから選ぶような住まいは、その地域の湿気や風雨、雪などに耐え

きれず、意外に脆い。地域ならではの住まいのつくり方があり、その極意をわきまえて、地味ではあるが地道な職人技術がなせるワザで造られた家が実は長寿命であり、景観にも馴染んでいる。また、柱と梁に金物を極力使わず、木と木を組み合わせる仕口の技術や壁の強度を高めるために、斜めの筋交いを使わず、水平の貫という部材を柱に通し、割竹を下地にした伝統的な土壁で造られた住宅は、最近の実験で地震に対して粘り強く持ち堪える合理的な構法であることが証明され、見直されている。

近くにある素材を使い、近くにいる職人の技術で造ることの価値を今一度評価する時がきている。

■地域の技術を受け継ぐ

今、この地域の技術を受け継いでいくことが難しい状況になってきている。

木造の伝統構法に対応しきれない法令。多様化する住まい手の意識の変化。技術の担い手となる造り手の高齢化な



大工職人が使う墨壺



練り込み跡のある鼻柱

ど。伝統技術を受け継いでいくための環境は極めて厳しい状況にある。一方で、伝統構法を再評価する制度づくりへの機運の高まり。住まい手の自然素材や地域主義への関心の高まり。若者の建築職人という職能への意識の高まりなど。やや明るい兆しも垣間見られる。

もう数年前になるが、この地域の技術にこだわりながら拙宅を再生した。伝統構法の技術にこだわり。自然素材をいかす技術にこだわり。地域にいる職人の技術にこだわった。私の気負いをよそに、職人は何も考えずに淡々と造っているように見える。このことがすなわち、永い歴史に裏打ちされた地域に受け継がれる伝統の職人技術なんだ、と後になって気づいた。

滋賀県で伝統技術の家づくりを实践する大工の宮内寿和氏は語る。「木組みとか伝統構法とか、自分の大工としてのこだわりを満足させるためだけの家づくりじゃ、あかん。…大工の頭の中が大工技術のことだけでいっぱいになってはいけない。目の前の木と向き合うことだけに満足してはいけ

ない。自分が大工として生きていけるのは、施主があつてのこと。だから、施主の幸福を第一に考えなくては」（「職人がつくる木の家ネット」パネル）
地域に根付き、地域で受け継がれてきた伝統技術は、傲慢であつてはならない。地域に謙虚であつてこそ、これからとしたかに受け継がれる。

清水玄治

● しみず やすはる 1961年、高島市生まれ。自宅の改修をきっかけに古民家再生の魅力を知り、ライフワークとして県内各地で再生に取り組む。民家の古材を活かすとともに、近くの山の木を使うことで、地域の資源にこだわった家づくりをめざしている。「湖北古民家再生ネットワーク」「安曇川流域・森と家づくりの会」メンバー。滋賀県政策調整部地域振興課職員。一級建築士。

連絡先 y43zu@guitar.onn.ne.jp

もったいない学会便り

〈2008年第4回サロン講演会〉

もったいない学会EPR部会の講演会が、2008年7月14日(月)15:00から東京大学工学部4号館(旧)地球システム会議室で開催された。



「農地活用と二毛作で自給自足の道を」川島准教授

なぜ、日本では「もったいない」と言いう言葉が出来たか

— 農業生産と人口から見た世界と日本 —

川島 博之

(東京大学農学生命科学研究科 准教授)

① 2年ほど前から世界の食料生産の調査をしているが、日本は特殊な国であるとの感じが強くしている。例えばイギリスでの学食の食事、配膳で肉と魚と山盛りのフレンチポテトがでる。全部食べるのではなく、食べ残しが当然という感じであり、日本人には違和感がある。英語にはない「もったいない」の言葉をそれらから説明できないかと考えた。

② 食料の生産量を決めるものは次の3条件であり、これらが複雑に絡み合っている。

a 環境↓農地面積、降水量、気温、土壌の肥沃度

b 技術↓単収の改善、栽培適地の拡大

c 経済↓人口、需要、世界の所得分布
20世紀中ごろまではaの影響が大きく、その後bの技術が非常に発達してきた。特に日本は栽培技術の発達が早かった。そしてc、現在は所得の問題も大きく関係している。

③世界の土地利用の状況と最大扶養人口
世界の農地は16億ha、しかし休耕地が3億haあり、拡張可能な面積は11億haあると試算されている。従って拡張可能な最大農地面積は26億haとなり、この60%に穀物を栽培し、単収を8t/haとすると生産量は125億トン、一人当たりの穀物消費量を日本並みの350kgとすると地球の最大扶養人口は360億人となり、意外に大きい数字になる。ただし、この8t/haという数字は現在の最高水準であり、これを支えているのは農耕技術と化学肥料、これが崩れるとこの試算は成り立たなくなる。

④世界の穀物生産量と人口の伸びとを億トンである。

④世界の穀物生産量と人口の伸びとを

比較すると、1961年を1とした場合、現在、人口は約2.1、これに対し穀物生産量は約25。人口の伸びを上回っている。これは「世界の穀物生産量と人口」に示してあるが、いま、一部の国で食料不足が言われているのは所得の問題であって、価格高騰に対応するだけの国力の不足が原因である。

⑤単収の推移を見ると、1950年以前は1.5t/haで徐々に増加してきたのに対し、ハーバーボッシュ法による空中窒素の固定法の発明による化学肥料の増産によって1950年以降、単収は驚異的な伸びを示し、現在は7t/haを上下する段階にまで到達している。「驚異的な単収の増加」を見てもらいたい。

⑥日本の特殊性を説明するために、人口の増加と農地の不足に対する対応策について、同じ島国であるイギリスとの比較を行った。

まず人口の比較であるが、江戸時代日本の人口は約3000万人、イギリスはそれより若干少なかった。現在の人口は日本が約1億3千万人と大幅な増

加をしたのに対し、イギリスは5500万人と半分以下である。これはイギリスが戦略的に行動し、移民を積極的に行って約2100万人がアメリカを中心に出て行ったのに対し、日本の移民数はブラジルなどへの約100万人に過ぎない。また、国内の土地利用の面で比較すると、イギリスは森林を草地に変えていったのに対し、日本は森林と里山を残してきた。つまり、人口は増えるのに対し耕地は増えず、その中でつましやかに生きる道を選んだのである。

⑦これを年代順に見てみると、

- ・縄文時代：採取、漁労の時代、人口は10万人
- ・弥生時代：河川の下流に水田を開拓、人口は60万人
- ・奈良時代：水田が平野に拡大、人口600万人
- ・平安時代から戦国時代：関東、東北が開墾され、二毛作が普及し、開拓の時代。人口は1000万人
- ・江戸初期：開墾が進み、国土開発の限界、「もったいない」の思想が発生。人口は1500万人

・江戸後期：環境容量が上限に達して人口停滞（姥捨てなど強制的な人口調整）で、「もつたない」の思想が進展。人口は3000万人

・明治時代：欧米の科学的農業が進展し、「坂の上の雲」の時代。

・昭和戦前：科学技術の限界、人口は倍増し、軍国主義を謳歌。人口は6000万人

・昭和戦後：第二の「坂の上の雲」時代、食料の輸入が多くなる。人口は1億人

・平成時代：経済的閉塞感と地球環境問題がクローズアップ、「もつたない」の見直し。人口は1億2700万人

以上に示したように、江戸時代、国土開発が限界に近づいて人口増加が抑制され、そのような中で「もつたない」の考え方、三河の徳川家康の考え方が広く支持され、拡大されていったものと考えられる。

⑧江戸時代以降における農業の進展を数字で見ると、以下のようである。

・1600年頃 1227万人 220

万人 6.1人/ha

・1700年頃 3128万人 296

万人 10.4人/ha（鬼頭2007より）

・1874年 3481万人 454万人

7.6人/ha

・1961年 9498万人 608万人

15.6人/ha（農林統計より）

因みに、世界の平均値は5人/haであり、日本の数字は平均値の約3倍と高い数値を示している。

⑨これを図示したのが「穀物単収比較」と「米の単収比較」であり、戦前から日本の単収が高かったことが示されている。東南アジアの国の単収は日本の半分程度であり、技術の導入などによってこれを引き上げれば、深刻な食糧危機には陥らないであろう。日本は「もつたない」精神でつましやかに自給自足を目指し、高度な技術を以って世界の食料不足の解消に向かうべきであろう。

最期に、参考までに「一人当たりの穀物供給量」を図示したが、昭和前期に減少し、その後一旦は増産されたが、1960年以降、輸入が拡大し現在の

自給率は39%である。現在の農地は約600万ha、100万haくらいは戻ってくる可能性があり、これに二毛作を取り入れるなどを考えれば、つましやかな自給自足の生活は可能と考える。

滋賀県民のルーツ（哲学）
「三方よし」を日本に広めることは可能か

辻村 琴美

（MOH通信編集長、
「ミニミニチャーキテクト」



「古いけど新しい三方よし」辻村氏

同志社大学の末永教授は「三方よし」についての第一人者ですが、先生が書かれたものを最初に紹介します。「食品関係の偽装が相次いで発覚している。昨秋以来の船場

吉兆の産地偽装をはじめ、最近では水産卸会社の中国産ウナギの国産偽装や食肉卸業者の飛騨牛偽装などである。

使い回しは、高価な料理を装った客への裏切りだけでなく、残り物の料理であることを知っていた仲居さんが憐れんでみていたであろうと想像した場合、客に言いようのない屈辱感を与えることになった。裏切りと屈辱と、客に対する二重の侮辱である。客を徹底的に侮辱した船場吉兆の廃業に、弁解や同情の余地は全くない」（京都新聞 2008・7・4）

これは、「もったいない」とは感謝する心ですが、その感謝するところを忘れていくとの批判だと思います。「三方よし」は「売り手よし、買い手よし、世間よし」ということですが、吉兆やその他の偽装業者はこの逆をやったわけです。客と売り手との間の信頼関係が失われているところに一番大きな問題があると考えられます。

末永先生の書かれたものの紹介をもう少し続けます。

「『三方よし』の利益に関する考え方

の一端を紹介します。中村治兵衛は、商売は儲かる場合もあれば損する時もあり、それが天道の恵みであると論じている。西川甚五郎は、たとえ品薄でも余分の口銭を取ることを戒め、外村与左衛門家の家訓は、「安売りしすぎたかな」と、売って悔やむ取引を商人の極意とせよと説いている。いずれも顧客満足を第一とすることによって、家業永続を願っているのである。

良き人材を集め、顧客満足を重視しながら、企業の社会的責任と社会貢献を全うしようとする企業にとって、しっかりとした倫理感を確立することは、船場吉兆などの二の舞を防ぐ何よりの方途である」（同）

商売で儲けることは当然であるけれど、その金をどのように使うのか。「世間よし」ということはそれを公共のため、教育のため、人の育成のために使っていくということではないでしょうか。近江商人魂に「陰徳善事」というのがありますが、これは人知れず善行を行うことを論じている言葉です。今の社会にはこの鑑が抜けているのでは

ないかと思うわけです。次の時代に会社を存続させる鑑を持つこと、それが大切だと思います。

私は「MOH通信」の編集長をしています。Mは「もったいない」、Oは「おかげさま」、Hは「ほどほどに」の頭文字ですが、MOHは「モウー」、牛の鳴き声でもあります。牛のキャラクターを使ってこのMOHを広めていきたい。それが「三方よし」に繋がってくるはず。若い人たちをターゲットにしてPRして行きたいと思っています。

そして、その「近江商人魂」は現代の経営にも充分に通用すると思います。「三方よし」は買い手よし・売り手よし・世間よし現代の顧客満足・社員満足・社会貢献に通じています。

「利真於勤」は働くことで利益をもたらすものの例え、浮利を戒めています。「陰徳善事」人知れず善行を行うことを論じています↓自己顕示や見返りを期待しない。

昨今の企業が忘れ去っていることで、この近江商人の三つの魂は、却って新鮮に感じられます。



せっせせせとウロコとり、初参加の中村さん(左)

環人会ツアーvol.3

「守山ツアー」

第3回環人会現場勉強会「守山ツアー」は、午前
に「屋外広告物ツアー」、午後「ふなずしツアー」
の2本立てで開催しました。

■6月21日(土)

■案内役:「屋外広告物ツアー」 藤原直樹
「ふなずしツアー」 嶋田奈穂子



JR守山駅前のベンチで屋外広告物の説明

屋外広告の掲示は ルールを守ろう

「屋外広告物ツアー」では、案内役（藤原）が業務で担当していた屋外広告物について「JR守山駅周辺にある実物を見ながら「建物の壁面を利用して表示されているのが壁面広告物で…都市計画法の用途地域によって表示できる面積や高さに制限があって…」と種類や表示基準を説明しました。また、電柱や街路灯にはり紙等を違法に取り付けられている違反広告物を地域の方々に取り除くことができる「違反広告物除却



変わった形をしたレンガの塀

推進員制度」の内容を説明しました（案内役は本制度の制定に関わりました）。本制度を利用して現在県内で3つの自治会・団体が地域の美化や防犯安全のために活動されています。説明後は周辺を散策しました。古い行まいの町家や変わった形をしたレンガの塀、ホテルのオブジェなど、わずかな距離を歩いただけでしたが、守山の魅力をあちこちに見つけることができました。

琵琶湖は生活の場

「かなずしツアー」では、まず、守山漁港で漁師戸田直弘さんに琵琶湖や漁について話をさせていただきました。「時期と場所が魚は違う」「昔は対岸の堅田に届くほどの大きなえりがあった」「なれずしを食べる文化は滋賀県を長く愛し続けてくれた証」琵琶湖が生活の場である戸田さんの話を聞いていて、私は琵琶湖の表面的なことをほんのわずかに知っているだけなんだということを思いました。「ブラックバス、ブルーギルの話は1週間かかるので」と冗談めかしておっしゃられていましたが、



違反広告物除却推進員のユニフォーム



守山漁港で戸田さんの話を伺う

魚の種類を教えていただいた





この日はワタカが大漁だった



まずはウロコを取ります



男前の漁師戸田直弘さん



黙々と作業



お腹に卵が詰っています



塩漬けの準備ができた
ニゴロブナとワタカ



戸田さんがつくってくださった
鮎の飴煮。とてもおいしかった



桶いっぱい敷き詰めました



桶を囲んで



塩をお腹に詰め込んでいきます

外来魚対策の大変さが滲みでてい
るようでした。

● 五目ふなずしに挑戦!

次は戸田さんの指導のもと、ふなずし
の塩漬けを実践しました。魚は当日早
朝から案内役(嶋田)が漁に出て獲って
きました。この日獲れたのはニゴロブ
ナ、ギンブナ、ワタカ、カマツカ、オイ
カワ、ハス、ウグイ。まずえらを落と
してウロコを取り、ニゴロブナとギンブナ
は頭を残してえら、のどぼとけ、目玉、
お腹や浮き袋を取り除き(ポン抜き)水
で洗いました。その他の魚は作業のし
やすさのため頭を落としてお腹や浮き
袋を取り除いて水で洗いました。卵を
もっている魚が多く、卵まで取り除か
ないよう注意が必要でした。次にお腹
のあいたスペースに塩をしっかりと詰め
込みます。そして桶に魚と塩を交互に
敷き詰めていきます。参加者のほとん
どがふなずしを漬けたことがありませ
んでしたが、思い思いに作業を楽しむこ
とができました。年末には自分たちで
漬けた魚を食へられるようになります。

美味しいシソジュースで 元気になろう

— 比良の元気なシソを作る会



休耕田に手植えたシソの苗8月の収穫が待たれる

**ハイヒールを長靴に履きかえた、
ちよいヤバのマダムが仕掛ける**

6月8日(日) 滋賀県大津市まほろばの郷(大津市横木)にて、紫蘇の苗植えが行われた。女性を中心とする自称「ハイヒールを長靴に履きかえた、ちよいヤバのマダム集団」30名(70才〜40才)が1000㎡の休耕田に500本を植えた。

収穫は8月上旬の予定で、シソは会員の手によって約300ℓのジュースに加工される。販売も視野に入れており、オリジナル地域ブランドに育成する予定だ。

江副さん(46才)は蓬萊からの参加者。「今回は、比良の元気な紫蘇を作る会」の旗揚げイベントです。シソジュースは酸味があつて飲むとしゃっきりします。美味しいですよ。不要な添加物も使っていません。出来上がりが、楽しみです」

代表の三浦みかさん(50才)は「女性をターゲットにしています。農薬を使わない本物のシソジュースをご提供

したい。休耕田を有効に活用し、會員の交流の場となり、輪が広がる事を期待しています。この活動が地域に広まり引き継いで下さることを期待しています。」シソは育てやすく、収穫時期が早い（6月苗植え、8月収穫）ことが特徴で、お年寄りからお子さんまで楽しんで育てて欲しいそう。試行錯誤の取り組みだが、回を増すごとに輪が広がる。

地元も参加者も一体になる快感

地主の田中さんは、快く休耕田を貸してくれた。「減反を利用してもらうと思って提供しました。こんなに皆さんに喜んでもらえて、嬉しいですわ。いいことや。地元の活発な取り組みになればと願っています」

最年少の参加者は笹川裕康君（9才）。休耕田に立ってかけられていた看板を見て参加したそう。 「泥が思ったより深かった」。参加者の多くは初体験で、楽しそう(?)に泥と格闘していた。当日はびわ湖放送の取材もあり、休耕田は賑やかな歓声がこだましていた。

すっぱい刺激が美味しい

〈シソジュース〉収穫したシソを乾燥・洗浄し、熱湯で煮出す。煮汁からシソを取り出しクエン酸（レモン果汁など）を加えると、にごった煮汁が透明なピンク色に変化する。好みて加糖（蜂蜜、糖など）し冷蔵保存。長期間の保存ができる。ストレート飲用でも、ソーダ、アルコール類、水類で割っても美味。疲労回復、美肌効果、健康促進、アレルギー改善、アトピー、花粉症に効果があるとされている。希望により、シソ葉（1株100円）の販売も可能。

リラックスしながら体も動かそう

〈比良の元気な赤紫蘇新聞「Purple」〉（紫蘇の学名）より

6月8日の旗揚げイベントにご参加いただいた皆様、本当にお疲れ様でした。気にしていた雨も降らず30名もの参加者で賑わい、まずは大成功の幕開けでした。田んぼのコンディションが悪くて大変でしたが、足腰の痛みは大丈夫でしょうか？雄大な比良山をバックに、

作業に飽きてカエルとりに熱中する子どもたち、はにかみつつ大胆にポーズをとってファインダーに収まるママたち。とてもリラックスして楽しめました。



雄大な比良山系をバックにみんなでバンザイ!

●比良里山クラブII(代表)三浦みか
〒520-0063
大津市横木2-25-12
TEL&FAX 077-527-2800
Email: you-shun59@nifty.com

「人間の学」 (森信三先生著)を読む その四

井上 昌幸



今回も第一部「生き方の基本」から大切な箇所を抜粋していきます。

十二・幸福について

○人生の幸福

・一歩突っ込んで「では幸福とは一体どういうことか」と尋ねられますと、すぐには答え得ない人が多いのではないのでしょうか。この人生における真の「幸福」とは一体どういうものかという問題について、多くの人が、意外にもハッキリとはつかんでいないようであります。

○足るを知る

・現在自分は不幸だと思わない状態こそ、実は幸福な証拠であります。

・「足るを知る」ということが、人生を幸福に生きる一つの大切な心がけであります。(吾・唯・知・足という言葉があります)

○表裏両面の調和

・人間の幸、不幸という問題も、必ずしも物の多少だけでは決まらぬことです。そこで幸福になる重要な条件として、次の二カ条を加えたいと思います。

(一)もし幸福を願うなら、絶対に自分を他と比べてはいけません。

(二)われわれ人間は、最終的には、結局自分の現状に対して感謝する気持になれたら、はじめて真の幸福に浸ることができましよう。

私達は幸福を外に求めがちですが、自分の心の中にあることを自覚する必要があります。「いま・ここ」の自分を見つ

めて「足るを知る」、「自分を他人と比較しない」ことが出来ているかどうか自らを省みたら如何でしょうか。

十三・感謝のこころ

○真の幸福とは

・真の幸福とは、その人にどれだけ感謝の念があるか否かという問題にもなりません。わたくしたちが、「ありがたい」とか「かたじけない」という感じを受けるのは、自分としてはまったく予期していなかったのに、人から好意を寄せられるというような場合が考えられましよう。

○謙虚な気持

・現在の自分の生活のすべては、自分のような人間にとつては、もともと受けるに値しないというように考えられるとしたら、不平不満というものは一切ないわけで、そういう人こそ、真に幸せな日々を送っている人といえます。

○無限の賜物のおかげ

・わたくしたちが今日あるのを得たのは、世の中のあらゆる人びとから、直接・間接に、その恩恵を受けて来たからでもあります。わたくしたちの着ている衣類をはじめ様々な道具や品物にいたるまで、いわんや太陽の光とか、空気や水などということになりますと、これは全くわれわれ人間の力によって生み出したものではないのであります。

○大宇宙の根源力

・現在の自分の生活の一切は、すべて自己以外の力によって恵まれ与えられたものだということがわかるはずで、そしてそのような一切の力が、根本的に統一せられている大宇宙の根源的な力を、人びとは古来神とか仏とかいいう名

前で呼んでいるのであります。

○生きがいのある人生

・この世において何が一体幸せな生活か、それを一口で言ってみますと、それは生きがいのある人生を送ることだと答えることができるでしょう。

では、「生きがいのある人生の生き方」とはどういうものかと考えますと、

(一) 自分の天分をできるだけ十分に發揮し実現すること。

(二) 今ひとつは、人のために尽くすということ。

・われわれ人間が、この世に生まれて来たのは、何かその人でなければできないような、ある使命をおびて、この世に派遣せられたものといつてよいからであります。

「生き甲斐とは何か」、それは今日一日を振り返って楽しい一日であったと実感することではないだろうかと思えます。

日常生活の中で、前回書きました中江藤樹先生の「五事を正す」(貌・音・視・聴・思)を自ら実践することが出来れば、それは生き甲斐につながるものであると思えますが如何でしょうか？

井上昌幸

●いのつえ まさゆき1940年1月1日生まれ。現在、滋賀県異業種交流連合会会長、STEP21(滋賀県シニアテクニカルエンジニアリングパートナーズ企業組合)専務理事、関西師友協会生涯学塾講師、大津木鶏クラブ代表世話人、近江素交会代表世話人

〈商家の家訓の話 第六回〉

矢尾喜兵衛の所感(四)

商家の主人の心構えと子弟教育

末永 國紀



初代矢尾喜兵衛の行商時の着衣

近江商人四代目矢尾喜兵衛によつて嘉永六年（一八五三）に著された「商主心法 道中独問答寢言」は、文字通り商家の主人の心構えを箇条書き風にまとめたものである。そのなかには、子弟養育に際しての主人の言動や態度についての心得が含まれている。今回は、奉公人を育てるときの主人の振る舞いや、奉公人への接し方、指導について述べられた箇条を拾い上げてみよう。

先ず、主人には全店の師表となることがもとめられている。次のような箴言である。

一 主人たる者、家内の者より一割増しの粗食、二割増しの粗服、三割増しの慎み、物の冥加をよく弁え、すたる事を恐れて家内へ示し、欲にして心正しく身を軽く、質素にして色欲薄く万事慎み深く、仁恵の心を本として、常に陰善の志を専要とし、我に心に叶わざる事は天の赦したまわざる事と覚悟し、心に思わざる幸ひ来る事は天の与へたまはる事と拝受し、諸事天に任せ、我意を用ひざる時は、天必ずあしく御はからはから斗ひ

なく、順道に守らせたまふらん。

主人は率先して粗衣粗食に甘んじて、
慎み、仁恵と陰徳善事の心構えの必要
なことが説かれている。また、節約を守
り、始末して物のすたらないように心
がけるのは良いが、そうかといって、す
べてを勤定詰めにして簡略にするばか
りではこれまた良くない。「商人の身分
たりとも、多人数を扶持する身は諸事
儉約のなかにも公の心持ある事をよし
とするなり」と述べ、多くの奉公人を使
う大家の商家の主ともなれば自家のそ
ろばん勘定のみからする儉約ではなく、
公という世の中全体から見ても儉約の
心持をもつことが必要と述べている。そ
して、身を慎むということにおいては、
子孫と手代の目もつとも怖いもので
あり、この二つの目を常に意識し恐れ
ていけば、自然に身の慎みになるとも
論じ、その上で大家の主人であつても、
日課としての勤めは先祖親御への奉公
と思つて大切にしなければならぬと
教えている。

このように主人に率先垂範をもとめ
ながら、子弟教育においては、まず奉

公人をまつとうな人間に育てることこ
そ主人の心得であると、次のように述
べている。

一 商人の主人たる者、他人子を抱
え給金賄ひ等出すといへども、これ
我が渡世の上なれば尤もいわたり有
るべき筈の事なり。我愛子も他人の
愛子も親として子の愛かわる事なし、
無理非道の事は申すに及ばず、時に
おいて辛抱安からずといへども、猶
行く末の一大事のみ思ひやり、偏に
人の人たる処へ至らしむる事、主人
たる人の第一心得なり

商家の主人が、他家の子供を召抱え
て給金や賄を与えるのも生活のためで
ある以上、奉公人を我が子と同じ様に
愛し、労わりの心がなければならぬ。
非道の扱いをしないのは当然であり、
赦せないようなことがあつても簡単に
は見捨てずに、辛抱強く人の道を守ら
せ、一人前に育てることが主人として
の心得であると述べている。さらに、
子弟養育の際、その能力や人柄の長短
を弁えて指導することの必要なことを
「人の才も道具類と同じことにて、不

得手の事に用ひその者の不能を責める
は、主人支配人たる者の不明と言ふも
のなり」と、能力の得手と不得手を把
握して育てることの大切さや、「店方
において子供を抱へ世話するにも、い
たづら気の者と内気の者とその差別を
よく考へて仕ふべし」と、人物の性格
に応じて接することの重要性も指摘し
ている。商家の主人は、率先して範を
垂れながら、能力や人柄に差等のある
奉公人に、愛情を持つて一人前の商人
に育て上げることが力説している。そ
の説くところは、現代においても何等
の遜色もない、至極まっとうな子弟教
育論である。

近江商人に学べ 末永國紀

●すえながくにとし11943年生れ。
同志社大学経済学部教授。経済学博士。
(財)近江商人郷土館館長。
著書／『近代近江商人経営史論』(有斐
閣)、『近江商人』(中公新書)、『近江商人
学入門』(サンライズ出版)

〈MOH-ECOTOURISM-10〉

ツーリズム最前線— トレイルスルーで見えたもの

檀上 俊雄

テントサイトの夕暮れ。食事を取りながら、今日一日の好ましい印象や辛かったことなど話し合うのは楽しい。朝夕の自然の営みも驚くほど多彩で、目を見張るばかり。日が沈み、あたりが暗くなる頃には、疲れからか早い就寝時間となる。

この春の連休に、中央分水嶺・高島トレイルのスルーツアーが運営協議会主催で行なわれた。スルーとは、起点から終点まで連続して歩くものだ。今年の連休は前半、後半に分かれるために、参加者の都合を考えて二分割にした。理事である私がガイドを務め、4月26日から28日にかけて愛発越から水坂峠、5月3日から5日で水坂峠から三国岳とし、それぞれ二泊三日で40キロずつの行程とした。幸い天候にも恵まれ、同行サポートをあわせて10人前後で歩くことができ、とても有意義な6日間であった。

トレイルを細かく分割して楽しんでもらう日帰りツアーもこの春からスタートしたが、山中で泊まりながら行なうスルーでは、歩くだけでなくキャンピングの技術も要求される。募集する際に、ソロテント持参、食事の準備も各自でという条件を提示した。意欲があっても山中でのテントの経験がない、重い荷物を背負う自信がないという人には、まずトレイニングを積んでもらい、次回への参加をお願いした。誰でも

参加できる様にしたところだが、安全が第一なのでやむを得ない。

高島トレイルの持ち味は12名山と12の若狭越の峠にあるが、峠道は林道となつているものも多い。山中でのキャンプは快適だが、自然保護の観点から林道脇の空きスペースを仮のテントサイトとした。トレイル上での携帯電話の通じる区間はわずかであり、スルー隊の状況把握は欠かせないことから、林道を往復して直接コンタクトを取ることにした。その地点が宿泊地点であれば容易に合流できる。峠では飲み水が確保できないので夕方に必要な量を運び上げ、早朝には出たゴミを降ろすことが林道サポーター隊の主な仕事となる。スルー隊の体調によっては荷物の一部を次のサイト地まで搬送したり、補充の食料やスポーツドリンクから缶ビール注文まで引き受けたりもする。そして一日ごとに同行する日替わりサポーター隊は、この車に乗って入下山する。こうした同行と一日二便のサポートがあれば、急病やケガなどが万が一起きてても速やかな対応が可能となるの

である。

登山やアウトドア用具は、厳しい気象条件にも耐えられる高機能化と共に、軽量化がめざましい。背負うザックの重さは、2泊3日の行程だと10キロ前後に抑えることが可能となる。10年、20年前では考えられないことだ。この程度の重さなら、トレイニングさえすればだれでも背負って歩くことができる。


テントによる宿泊は、黒河峠、近江坂、横谷峠、おにゅう峠で行なった。林道脇ではあるが、周囲のブナ林は美しく、夕日や朝日を眺め、鳥の鳴き声や風の音を耳を傾ける山上のキャンプは素晴らしいものであった。間近でシカの悲しげな鳴き声が出てハラハラ、ドキドキの一夜もあれば、夜半に強風が吹きテントが思い切り傾いたりしたこと。終つてみれば貴重な体験であった。

ソロテントを立てる際には誰言うことなく、出入り口をお互いに見える方向にした。朝夕は冷え込むのでテントの中に入るが、入口を開けておけば食事時間も話をしながら楽しく過ごせる。適度な距離を保ちながら、トレイルスルー

に欠かせないパーティシップを高めることもできるというものだ。地元の人にサポーターされているという気持ちだが、歩く者同士もお互い助け合い、力を合わせて目的を達成しようという意識につながったことは容易に想像できる。

ガイドは、参加者ひとりひとりの体調とコース状況を的確に把握し、持てる力を十二分に発揮してもらえよう誘導をするが、もともと重視するのがパーティシップである。チームの一員という意識が高まれば、難コースでもメンバーは持てる力以上に力を発揮し、問題なく事が運ぶことが多い。

スルーの一日の行程は長く、15キロから20キロ近い時もある。日帰りだと10キロ前後が一般的だが、ゆっくり歩けば日数が増え、荷物も重くなつて動きが一気にペースダウンする。途中でギブアップする人も出かねない。中央分水嶺を連続して歩く醍醐味は、テンポよく適度なスピードで歩くことで得られることが多い。また、一日中同じペースで歩き通せる人はなかなかいない。そうした時、出発して次の宿泊地へ到着

A photograph of a dense forest with large, gnarled trees. In the foreground, a hiker wearing a white hat and a red backpack is walking on a dirt path. The forest is lush with green foliage, and the trees have thick, textured trunks. The lighting is natural, suggesting a sunny day with some shade from the canopy.

大型動物を育む生態系が維持された自然、山に生きた人たちの舞台であった自然というものは、地元の人にとっては日常見慣れたものであるが、各地を旅し山をめぐり歩く人にとっては、日本列島における森の見本園のような共生の風景は感動の連続となる。

するまでのペース配分や行程管理の考え方はとても大切であり、ガイドは出発して到着するまで、そればかり考えながら歩いているといってもいいくらいだ。そしてテントサイトへは早めに到着しなければならぬ。着いたらテント張り、食事の準備と、多くの仕事が続いているからだ。

幸いなことにアクシデントもなく、すべてが予想以上に順調に進み、皆が満面の笑みを浮かべながら最後のピーク三国岳に立ち、ゴールの桑原へ無事下山することができた。近くの山村都市交流センター山帰来でシャワーを浴び、平良ふれあいセンターで地元産鹿肉のバーベキューに舌鼓を打つ。高島トレイルにふさわしい打ち上げは大いに盛り上がり、話題は、はや秋のスルーへと移ってゆく。歩きやすく変化に富むコースは紅葉の時はどんなだろう、と彼らは興味津々なのだ。そして口々に言う。「今回のようなサポーターしてもらえなかったら、また来て歩きたい」。



最終日は長い道のりで、朝の6時におにゅう峠を出発。地蔵峠の原生の森で水を補給し、カベヨシというピークで昼食をとり、か細いひとすじの道をたどって岩谷峠へ。深い森の頂きをめざして一步一步登り、トレイル最後のピーク三国岳へ。

関係者が仕事の合間をぬって、時間やりくりをしながら交代交代に行なったサポーターは、ことのほか多くの人の心に響くものであったのだ。

高島トレイルの持ち味とはいったい何だろう、と整備をしながら皆で話し合ってきたが、このスルー参加者の言葉こそ、まさにその答えなのかもしれない。サポーターは、80キロのトレイルを

舞台にして、歩く人と、地元の人、自然、歴史、文化、観光など、高島にあるすべてのものを見事に結びつける。これを続けることができれば、その輪は次第に大きくなってゆくだろう。サポーターとウォーカーからなる「Circle Of The Trail」の誕生だ。皆さんも夢のトレイルを歩いてみませんか。

秋のスルーは10/11と13と11/1と3で、再び80キロの道のりをチャレンジ。これとは別に毎月の日帰りツアーも行なわれ、ピラデスト今津を主会場にしたトレイルフェスタ10/18と20も予定されている。問い合わせは

高島トレイル協議会
TEL0740・255・6010
(びわ湖高島観光協会内)

檀上俊雄

● だんじょう としお 1951年広島県尾道市生まれ。立命館大学文学部地理学科卒。山と自然研究会青山舎代表。日本旅のペンクラブ会員。
著書／「比良山・湖西の山」山と溪谷社（共著）

限界集落を無限集落に？

の巻
作：オノハチ

みなさん、限界集落ってどうですか？

人口減少
高齢化
生活の不便さ



最近、パソコンでインターネット検索すると、




「限界集落」とは、

世帯数の総人口の50%以下、65歳以上の高齢者が50%以上を占める集落を指す。

オノハチの住む集落は人口が16人。



そのうち65歳以上の人が56%です。



お！今、まさに流行りの「限界集落」の価値を



発見した。

しかも、こちらの子どもたちが一番若い。

6才 4才



そして、中学生の女の子が、菜田に若く



なんと、牛飼目がこのオノハチなのだ！



花の独白

つまり、さよならしたはずは集落唯一の幼児なので



お、お、来た。

オノハチ



オノハチ、オノハチ、オノハチ。



おーっ



みんな息子ももう一年生
娘は保育園年少組



ふたりは毎朝、
バスで通う。



もろさん 乗車券さん
伊さん

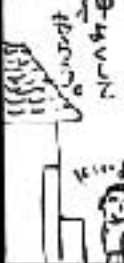


おはあ、
あはあ

休日には時々遊びにも
お隣の家族の子と...



お隣さん家へ
遊びに行き、
お隣さんとも
仲よくして



百太郎川で



冬は雪で



春は上野山へ...



いっー

限界集落

も、悪くないね。



なんでみんなは
限界集落に住まないの？



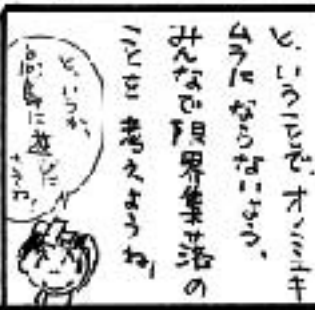
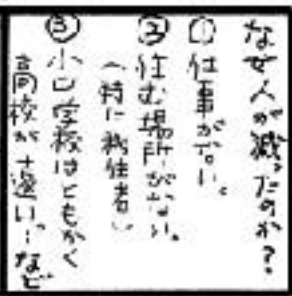
と、思っていたら、



おまえ、やっくんね。



とまわりの
ひまわりは
区のお
公園



●オノムキ (本名 加藤 みゆき) 1974年生まれ。滋賀県土佐町出身。
1997年に朽木村(現高島市)に移住。朽木の自然、行事、人間などを、冊の本にまとめて出版。現在は、人の子どもを育て中。

「秋の夜長を楽しむ夕べ」

森林公園「くつきの森」で行う「環境を考えるシンポジウム」も今年で3回目です。昔と今の森林と人間の生活の変化を説明していたとき、「森の将来はハッピーじゃないやん」という子どもの一言。今の森林を、将来を担う子どもたちにどう引き継ぐべきか。大人として何をすべきか。子どもたちに深く関わるパネリストと、会場のみなさんと、この素朴ですが重大な子どもの疑問に答えられるおはなしをしませんか。お茶を飲みながら、朽木のおいしい里山料理を味わいながら、そして星空の下で音楽を楽しみながら、秋の夜長を過ごしましょう。

日時 平成20年9月27日(土) 13:00~20:30

場所 滋賀県高島市朽木麻生443 森林公園「くつきの森」やまね館

日程 **I部 開会** **14:00**

座談会「ハッピーな森の未来をめざして

～大人から子どもへ伝えたい森林の世界～」..... **14:10~16:30**

パネリスト 今関信子氏 (児童文学作家)

中村美重氏 (NPO法人 クマノヤマネット理事長)

コーディネータ 森建司氏 (新江州株式会社代表取締役会長)

II部 開会 **19:00**

「秋の夜長を楽しむ夕べ」..... **19:10~20:40**

地元青年による朽木太鼓とジャズの生演奏

閉会 **20:45**

参加費 I部 2,500円 II部 1,000円 I・II部 3,000円

定員 100名(定員になり次第、締め切らせていただきます)

申し込み締め切り **9月20日**

お申し込み方法 申込用紙にご記入の上、郵便FAX、メールのいずれかでお申し込み下さい。

**お申し込み・
お問い合わせ先**

NPO法人 麻生里山センター

〒520-1451 滋賀県高島市朽木麻生443番地

TEL.0740-38-8099 FAX.0740-38-8012

HP <http://www.zb.ztv.ne.jp/fk7mkxbp/asosatoyama>

Eメール asosatoyama@zb.ztv.ne.jp

[主催] NPO法人 麻生里山センター

[協賛] MOH通信・高島森林体験学校 [後援] 高島市

シンポジウム 「石油ピーク後の課題・対策をEPRから考える」

石油ピーク、食料ピークにより、それぞれの値段の上昇が本格化してきた。石油などの資源、エネルギーをどの程度有効に使うかを評価する尺度がエネルギー収支比（EPR）である。EPRでエネルギー問題のみならず、輸送、農業、文明に関わる改善策を評価し、積極的にすすめる時期に来ている。

資源の有効利用の観点から日本の社会システムや考え方を変える必要がある。EPRの発想で、社会システム全体をとらえて、少ない資源、エネルギーで日本の活力を上げるには、どのような方策のEPRが高いかを評価することも必要である。EPR手法を広く啓蒙し、具体的評価も含めて、我が国の変革を応援する。

日時 平成20年9月19日（金） 10:00～17:00（9:30開場、受付開始）

場所 東京大学 本郷キャンパス 山上会館
(http://www.u-tokyo.ac.jp/campusmap/cam01_00_02_i.html)

参加費 資料代：1,000円、ポスター展示：10,000円、親睦会（17:30より）会費：3,000円

内容 1.講演

- 「石油ピークは日本社会に何をもたらすかーそのインパクトと文明論的対応」石井吉徳（東京大学名誉教授、もったいない学会長）
- 「リサイクル法の理念と現実の乖離と今後」保坂哲（環境アドバイザー）
- 「原単位とEPR評価手法の標準化と評価例」天野治（電中研、EPR部会長）

2.EPR手法を用いた話題提供

3.ポスター展示（次世代技術、本質と課題）

質議応答

申し込み締め切り 9月12日

お申し込み方法 E-Mailにて9.19シンポ参加とお申し込み下さい。
親睦会参加の有無もお知らせ下さい。

**お申し込み・
お問い合わせ先**

NPO法人 もったいない学会

HP <http://www.mottainaisociety.org/index.html>
Eメール guest@mottainaisociety.org

[主催] もったいない学会 EPR部会

[協賛] 日本工学アカデミー科学技術戦略フォーラム、東京大学工学系研究科、鳥取大学工学系研究科、省エネルギーセンター、先端技術戦略推進機構、化学技術戦略推進機構、科学技術者フォーラム、日本プラスチック工業連盟、MOH通信

心の友だちフレデリック

今関 信子



イラスト：千田 満

フレデリックは野ネズミだ。初対面は三十年ほど前。それから私は、時々彼に会う。

フレデリックは、仲間の野ネズミと牧場にぞった石垣の穴に住んでいた。

野ネズミたちは働き者だ。冬が近くなると、トウモロコシを集め、木の実と小麦を藁を集めた。昼も夜も休まず働く。

フレデリックは、牧場を見ている。目をつぶって、昼寝をしているようだ。

「フレデリック、きみは集めないのかい。」

「ほくも集めているわ。」

「じっとしていて集まるものなんかあるのかね。」

仲間の野ネズミは、腹たちまぎれていう。

「ほく、光を集めているんだ。それから色を。そして、言葉を。冬は寒いし灰色だから。その上、冬は長いんだもの。」

間もなく冬が来た。石垣に雪が積もった。

野ネズミたちは、集めた食へ物に囲まれて、ぬくぬく過ごした。そのうちトウモロコシがなくなつた。木の実も小麦も藁も底をついて、巣穴がやけに

広く感じる。凍えそうに寒くて、野ネズミたちは元気をなくした。

フレデリックは言った。

「目をつむつてごらん。お日様の光をあげるよ。燃えるような金色の光だよ。」

仲間たちのほほに赤みがさした。フレデリックは、青い朝顔や赤い芥子の花、木イチコの葉っぱの色を思い起こさせた。最後にフレデリックは、仲間の野ネズミの毎日を詩にして歌った。

「すこいね、フレデリック。きみは詩人だ。」

仲間たちの賞賛と拍手を浴びて、フレデリックははにかんだ。

今朝、私は久しぶりにフレデリックに会った。黙りがちに背中を丸めていた。世間から少しはずれて、やはりはにかんでいた。

私は言った。

「寒いんだ。」

フレデリックは、首を傾げた。

「もつすべく夏なのこっ。」

私はうなずく。フレデリックは、黙って私のそばに寄ってきて、そのままじつと動かなくなつた。私もじつとした。かき混ぜられた心の中が収まっていく。

最近、私の周りにも、財政の行き詰まりから、いくつか問題が起つてくる。滋賀県だけでなく、大阪府の問題も降つてきて、心がかき乱されることもある。「文化」は目に見えない。芸術なんて、あってもなくても良いように感じる。学問なんて、自分の暮らしに關係ないと思う。だから、行政が金銭的に逼迫すると、真っ先に文化行政を担う部署の予算が削られるのだらう。

だが、「冬」の時期こそ、いや、どんな時も文化は必要なのだ。私たちの内に社会の中に、根付いた文化は生きる力となって、私たちの暮らしを豊かにする。

私が師事する古田足日氏は、読みかじりの聖書の中で、（人はパンのみにて生きるにありず）という言葉にであったと言つた。敗戦間もない頃で、日本中が目に見える物にやつきになっていた時だったとつた。

経済は何を豊かにしようとしているのだらうか。

フレデリックは、きょうも貧しい。しかし、彼は、喜びに満ちて今日も生きていく。

M. Senda

● せんだ みつる 1950年、滋賀県生まれ。大阪のデザイン会社を経て1980年「イラストレーションスタジオアビロード」設立。イラストレーションを中心にポスターやパンフレット等を制作、ロゴマークやパース・キャラクターデザイン等グラフィック全般、広告・エディトリアルを中心に活動中。

● いませきのぶ 1942年東京生まれ。東京保育女子学院卒業後、幼稚園教諭となる。7年間保育者として働いた後、創作活動にはいる。日本児童文学者協会理事。
〈主な著書〉「小犬の裁判はじめます」1987年 草心社 青少年読書感想文コンクール課題図書。「さよならの日のねずみ花火」1995年 国土社 青少年読書感想文コンクール課題図書、厚生省中央児童福祉審議会推薦文化財。「地雷の村で『寺子屋』へく」2000年 PHP 研究所 など多数



講演日記

皆様のご支援でたくさんの講演依頼を頂きました。5月～7月の講演をダイジェスト版でお知らせします。

滋賀県立大学 市民参加論3回講座

日時：5月8日、22日、6月5日

●主催：環境科学部(石野耕也教授)

●演題：「持続可能型社会形成に向けての「市民参加論」Ⅰ～Ⅲ」

●会場：滋賀県立大学
●参加：50名
●講師：森建司

龍谷大学国際学部 現代社会と経営

日時：5月13日(火)
●主催：国際学部(吉村文成教授)

●演題：「エネルギーピークと持続可能型経営」

●会場：龍谷大学
●参加：100名
●講師：森建司

執筆者懇談会12

日時：6月5日(木)
●主催：MOH通信

●演題：「21号、22号企画案について」

●会場：安兵衛(山科)
●参加：17名

NPO・EEネット

20年度記念大講演会
日時：6月11日(水)

●主催：近畿エネルギー・環境高度化推進ネットワーク

●演題：「循環型社会の実現目指して」
●会場：滋賀ビル9階会議室

●参加：80名
●講師：内藤正明氏(琵琶湖環境科学センター長)、藤村靖之氏(発明企業塾塾長)、森建司

(新江州会長)

滋賀県中小企業家同 友会

北近江支部6月例会
日時：6月17日(火)

●主催：滋賀県中小企業家同友会北近江支部

●演題：「現在における商人道」

●会場：長浜ドーム宿泊研修センター
●参加：45名
●講師：森建司

野洲市

平成20年度男女共同参画フォーラム

日時：6月28日(土)
●主催：野洲市男女共同参画フォーラム実行委員会

●演題：「愉快な生活スタイルとそれぞれの関係づくり・環境づくり」

●会場：コミセンきたの
●参加：100名
●パネラー：辻村琴美

福井県・環境エネルギー懇談会 環境配慮型先進企業 視察

日時：7月8日(火)
●主催：福井県・環境エネルギー懇談会

●見学：eプラザ
●演題：「中小企業にしかない持続可能型社会の企業経営」

●会場：新江州(株)
●参加：36名
●講師：森建司

もつたいない学会 EPRR部会

サロン講演会
日時：7月14日(月)

●主催：もつたいない学会
●演題：「滋賀県民の1つ3万よしを日本に広めることは可能か」

●会場：東京大学工学部会議室
●参加：50名
●講師：辻村琴美

白鷺クラブ 第376回例会

日時：7月17日(木)
●主催：(社)京都工業会
●見学：eプラザ

●演題：「中小企業にしかない持続可能型社会の企業経営」

●会場：新江州(株)
●参加：11名
●講師：森建司

大阪府中小企業家同 友会

住吉・住之江支部7月例会
日時：7月23日(水)

●主催：大阪府中小企業家同友会住吉・住之江支部

●演題：「中小企業にしかない持続可能型社会の企業経営」

●会場：たかつガーデン
●参加：40名
●講師：森建司、辻村琴美

[京都新聞]

■お菓子の袋やレジ袋などプラスチック容器包装ごみの分別収集を行う自治体が増えている。回収されたごみは、運搬資材などにリサイクルされる。異物混入低下を目指し行政からの一層の周知が求められる。(7月3日)

■長浜市は、家庭でできる温暖化対策を考えてもらおうと、日常生活で排出される二酸化炭素の量が簡単に算出できる「環境家計簿」を製作、市民に配布を始めた。(7月3日)

■偽装と企業倫理 立ち返りたい「三方よし」 同志社大学経済学部末永國紀教授 食品関係の偽装が相次いで発覚している。情報化やグローバル化の進展は、これからの経営の必至の前提であろう。この企業環境の変化が、企業不祥事の発覚や地球環境問題の認識を深め、結果としてCSRという新しい企業の社会的責任に対する考え方を導き出した。(中略)江戸時代から社会の一員意識を持って、事業展開にあたったのが近江商人と呼ばれる人々である。「三方よし」に代表される近江商人の経営精神は、CSRと比べて少しも古びていない。(中略) 営利行為にとまらぬがちな倫理観の喪失によって惹き起される企業危機を回避し、近江商人の「世間よし」を日常的に達成していくには、仕事と社会

に対するバランスのとれた鏡を絶えず磨き上げる必要がある。(7月4日)

■身近なことから地球と生き物を守る取り組みを呼び掛ける「びっくり!エコ100選」が、京都に加え今年は東京でも行われる。(7月12日)

■近江鉄道(本社・彦根市)の夏恒例「ビア電」が14日夕、関係者らを乗せ走った。(7月15日)

■多賀町はこのほど福祉バスやスクールバス、移動図書館の車などディーゼルエンジンの公用車9台を廃食油から作ったバイオディーゼル燃料に変更した。(7月21日)

■農業振興、地域から発信を 新江州代表取締役森建司会長 (略)地球規模の食糧問題の中にあって、自給率を高め得るためには政府の施策や生産者だけに任せるのではなく、農地の形態や人件費など「他国に比較して高い」わが国のコストを読み込んだ「適正価格」で、消費者自身が「理解して購入する」ことが前提とならざるを得ないと思う。(6月22日)

■昔懐かしい「量り売り」で売られる商品が増えている。ごみを減らせるという環境への配慮のほか、必要なものを少量買うのが経済的だからである。(6月30日)

[日本農業新聞]

■食料自給率向上を目的に社員食堂で地産地消を広げる動きが出ている。滋賀県で

は県内企業を相手に登録制度で後押しする。(6月1日)

[日本経済新聞]

銅やインジウムなど電子機器の製造に欠かせない金属資源。価格高騰で、安定確保が企業の大きな課題になっている。非鉄金属各社の技術陣は、鉱石から有用金属を効率よく回収する新しい精錬技術の開発に知恵を絞っている。「微生物パワーで、捨てるしかなかった銅鉱石のカスが商品の銅に生まれ変わる」と日鉱金属の佐藤啓一専務。

[週刊ダイヤモンド]

■急速な原油高の理由のひとつとして供給不安が挙げられる。短期的に需給が逼迫しているだけでなく、長期的に見て埋蔵量が枯渇し始めたのではないかと懸念も巻き起こっている。石油供給に関する専門家の意見はさまざま。OPECが大幅な増産に踏み出さないのは、余剰生産能力を過大に積み上げて、原油価格を不必要に下落させたくないためではないかという論者から、そもそも原油が枯渇しはじめたのではないかとする論者まで。また、ピークオイルは05年にすでに過ぎていると主張する論者も居ればピークオイル時期はOPECの生産調整次第で変化するのであまり意味はないとする論者も居る。とはいえ、安い原油はかなりの量を掘り尽したという点では多くの関係者は一致している。

セミ

三山 元暎



さし絵：中川 善雄

八月二十三日は処暑。暑さがやむの意で、朝夕しだいに冷気が加わってくると大辞林にはあるが、それにしても暑い。地球温暖化のせいかな、年々、猛暑日が増しているようだ。彦根地方気象台のここ数年間のデータから一日の最高気温の平均値が三十度未満になるのは、九月下旬とある。

月の初め、三島池の桜並木でミンミンゼミの大合唱をきいた。かなりの迫力だ。真夏の太陽がアスファルトの道を灼き、ただでさえ暑いところにセミの大合唱。暑さが倍増する感覚にとらわれた。

つくづくと太陽に飽き蝉に飽き

藤原美峰

お盆が過ぎ、ここ数日前からミンミンゼミの鳴き声も弱々しく、残暑の中にも朝夕は、秋の気配が感じられるようになってきた。かわって、ツクツクボウシが数を増し、秋近しと告げている。夕暮れどき、ヒグラシがカナカナカナと一匹だけが鳴いているのを聞くと、もの悲しさを覚える。

ゲンジボタルは成虫になるまで川から上がって約四十日間地下にもぐることがなんとミンミンゼミは約二千日も地下で過ごす。ホタルと同様、セミもまた地上のいのちは驚くほど短い。この間、ホタルは恋に身をこがし、セミは恋し、恋しと、一心不乱、夢中になって鳴く。セミの鳴き声が衰えてくると夏も終わり、伊吹の里は赤とんぼの天国となる。

人あても人あなくても赤とんぼ
深見けんこ

三山 元暎

●みやま もとあき 1940年滋賀県坂田郡山東町(現・米原市)生まれ。長浜市の理事・経済部長を経て1995年8月から2005年2月まで山東町長。同月14日米原市誕生にともない退任。真宗大谷派真勝寺住職。

●なかがわ よしお 1936年生まれ。滋賀県展、長浜市展、伊吹を描く絵画展など入賞、入選歴多数あり。税理士。

本の紹介

最近入手した、
気になる本を、
ご紹介いたします。

BOOKS

エコライフ&スローライフのための嬉しい非電化



- 著者／藤村靖之
- 発行所／洋泉社
- 価格／1600円十税
- 内容／「電気を使わなくても快適・便利は実現できる」と数々の非電化製品を發明してきた著者が「電気でなくても、ホドホドならのできる」非電化製品の發明例を紹介。

こどもの心・おとなの眼 人間・障害・思想

- 著者／□谷清
- 発行所／クリエイツかもがわ



- 価格／1700円十税
- 内容／びわこ学園医療福祉センター草津の園長で小児科医でもある著者が、障害のある子を診察し社会活動に関わってきた中で考察した「人間の心」「人間と人間の関係の起源」について記した。

世界の食料生産とバイオマスエネルギー 2050年の展望



- 著書／川島博之
- 発行所／東京大学出版会
- 価格／3200円十税
- 内容／近年、石油価格の高騰に伴いバイオマスエネルギーが注目されているが、食料生産との競合問題が生じている。本

書では世界の食料生産の現状と今後について解説。

石油ピーク後のエネルギー——EPR(エネルギー収支比)から資源の有効利用を考える



- 著者／天野治
- 発行所／愛智出版
- 価格／1200円十税
- 内容／石油生産が伸び続ける需要に追いつかなくなってきた。まもなく石油生産はピークを迎え、終焉の始まりがやってくる。EPR(エネルギー収支比)から考えるこれからのエネルギー。

三上、燃ゆ



- 著者／中井三雄

● 発行／天保義民土川平兵衛顕彰会

- 内容／天保初期、近江の農村は不作ゆえの飢饉と幕府の不当な検地に苦しんでいた。そんな折、現在の野洲市三上地区で近江天保探が起る。一探に加わった要人土川平兵衛を題材にした小説。第57回滋賀県芸術文化祭受賞作品。

なんだこりゃ〜沖縄



- マンガ・映画・雑誌の中の(面白い深く描かれた沖縄)を求めて
- 著者／わうけいさお
- 発行所／ポーターインク
- 価格／1680円
- 内容／沖縄でもっとも注目を集める本。マンガ・映画・雑誌の中に描かれた沖縄を検証したサブカルチャーブック。著者のたゆみないオタクキーな視点と実地検証で日本と沖縄を鋭く分析。アマゾン品切れ、ポーターインク社に注文を。

「循環型社会を目指す～M・O・H 通信～」の発行に当たって

代表 森 建司

20世紀型社会は経済至上主義の時代であった。科学技術の進歩とそれに伴う工業や流通の発展は、世界的なスケールで人々に物による恩恵をもたらしたが、同時にバランスのとれた自然との共生社会を破壊した。経済至上主義とは物の豊かさを最高の幸せとして捉え、その対極にあるものの価値をほとんど消し去ろうとするものである。人々の価値観を情報操作で画一化して、特定のものに集中させようとするマーケット戦略は個人の人生観、社会観にまで侵入し、その独自性、不可侵性まで奪って行った。このことによって人々は哲学的な意味の自己をなくしてしまった。

今こそ新しい時代として循環型社会を作ろうとしているわれわれは、自己を証明する、こころとか思いを取り戻さなければならない。死生観とか人生観、先祖とか子孫、生涯をかける志、自己を自己らしく生き抜くための人生哲学など。そしてそれは自然との共生社会を目指すものであり、人としての真の生き様を問うものであらねばならない。

この実現のために

「循環型社会を目指す～MOH通信～」を発行する。

《 MOH通信概要 》

■目的

- (1) 循環型社会構築に向けた意識改革
- (2) 浪費型社会念の脱却
- (3) 人生哲学を学ぶ

■事業

- (1) 通信の発行及び出版
- (2) 講演会、勉強会、シンポジウムなどイベントの開催

■事務局

〒526-0111

滋賀県長浜市

川道町759-3

循環型社会システム研究所

TEL.0749-72-5277

FAX.0749-72-8681

e-mail:tsujimura@

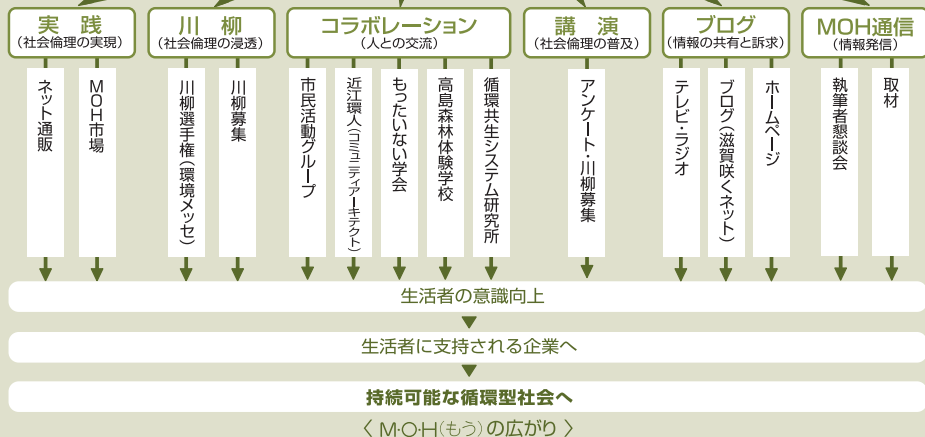
shingoshu.co.jp

代表:森 建司

担当:辻村 琴美

[M・O・Hコンセプトシート]

M・O・H=循環型社会をめざす言葉
(もったいない・おかげさま・ほどほどに)



読者の声

★「正しくは人間保護です」この一言に圧倒されました。悩み続け探していた方向ここにあると確信しました。

名木純子（東京都）

★心に残った一言「優しさは強さの中にしかない」松本茂之（長浜市）

★ブライアンさんの家は伊香立にあるんですね。知人も伊香立の築140年ぐらゐの古民家に住んでいました。柱が黒光りしていたのを思い出しました。
西本椰枝（西宮市）

★地球温暖化防止推進員（福井県）として貴社の循環型社会づくりには大賛成です。
山崎俊太郎（福井県）

★本誌、写真が美しい、自然が特にきれい、よいセンスです。内容もメディアで流行のCO₂一辺倒が無

くなり、抵抗感が少なくなりました。そして文化の香り、もったいない精神に通じる心に響く記事が多くなりました。
石井吉徳（東京都）「もったいない学会」会長

★当図書館にて大切に保存し、県民の皆様の閲覧に供したいと存じます。
滋賀県立男女共同参画センター（近江八幡市）

★この度は掲載誌をお送りいただきありがとうございました。大変すばらしくまとめいただき部署一同光栄に存じております。
小野亜希子（東京都アストラゼネカ）

★MOH通信の初刊発行から20号が発刊されるまで、もったいないの先駆者として、最新の情報発信者としては、相当なご苦労があったかと思えます。途中から読まれた読者のために発刊に至った経緯、熱い思

いを、特集されてはいいでしょう。
澤幹夫（長浜市）

★この度は執筆者懇談会に参加させていただき、ありがとうございました。ご参加の皆様、熱い想いを拝聴し大変勉強になりました。
山崎隆（大津市麦の家）

★MOH通信のホームページをたまたま見つけて興味深く拝見させていただきました。MOH通信の考え、思想に感銘を受け、またMOH通信の最新号のコンテンツを見てMOH通信を拝読したいと思いました。
汲田章司（千葉県）

★環人会守山ツアーに突然お邪魔したのにお仲間に入れていただきフナ寿司の塩漬けを体験でき夫婦で喜んでいきます。MOH通信も楽しんで読ませてもらいます。
中村八重子（MOH通信ブログより）

《次号予告》

2008年11月末発行予定

- 特集:挑戦「一歩前へ」
 - 対談／「新たな暮らしのつくり方」
滋賀大学学長・成瀬龍夫 + 森建司
 - 寄稿／「もったいない滋賀実現に向けて」
琵琶湖環境科学研究センター長 内藤正明
 - 寄稿／「モータウンの提案」
ロンドン大学博士課程 日下部笑美子
 - 取材／「体操服!いってらっしゃい・おかえりなさい」
岡部達平
 - 取材／「小鳥のさえずりで育つコーヒー」小川珈琲(株)
 - 海外／「かつてのルール炭鉱町は今」畑裕子
 - 連載／通常通り
- ※ 敬称略、予告なく変更いたします

編集後記

◎私は沖縄に行き、『笑顔』と、真摯な『まなざし』と、包み込むような『優しさ』に出合った。そして、自分が幼く思えた。それは“うるむい”のメンバーが楽しく明るく「平和、基地、乱開発」に立ち向かう姿にふれたから。そうだ、仲間と一緒に楽しく明るく、一歩前へ。
◎うるむいの皆様、和宇慶さん、ありがとうございました。

ことみ

《M・O・H通信》受付中!

あなたも「M・O・H通信」を読んでみませんか。特典として、M・O・H通信、講演会のご案内をいたします。活動やこの通信についての、ご意見もお聞かせください。

電話番号、fax(あれば)、e-mailアドレス(あれば)、あなたの心に残った一言をご記入の上、お申し込みください。通信をお送りします。申込書をfax、郵送、mailでお送りください。

あなたのお名前、年齢、郵便番号、住所、電

《M・O・H通信》申込書

フリガナ		年齢	希望冊数
お名前			
住所	〒		
電話	FAX	メールアドレス	
あなたの心に残った一言、MOH川柳をお書きください。			

※記入いただいた内容については、目的以外のことに使用または転用はいたしません。

キリトリ線

M・O・H通信 Vol.21 (通巻22号) 2008年8月末日発行 発行部数5,000部

●編集・発行/新江州(株)

循環型社会システム研究所
M・O・H通信編集局

代表 森建司
編集長 つじむら ことみ
編集協力 稲垣 重雄
取材 細井 美保

古田 紀子
西野美和子
辻村敏之
藤原直樹

デザイン 伊達デザイン室
写真 辻村写真事務所
印刷 新江州(株)情報C
ブログ 松崎 和弘
ホームページ 寺川 智美

●執筆者懇談会

内藤 正明 畑 裕子
海東 英和 堤 幸一
山田 朝夫 進 ひろこ
下西 康嗣 中村 誠
末永 國紀 笹山 千怜
花田 真理子 奥山 武生
弘中 史子 結城 美枝子
今関 信子 松崎 和弘
山崎 隆 井上 昌幸
三山 元暎 辻村 耕司
加藤 みゆき 佐々木 洋一
清水 安治 徳永 拓美
檀上 俊雄 中井 二三雄
山口 美知子
(順不同)

●ご協力

滋賀県 近江環人&環人会
琵琶湖環境科学研究 もったいない学会
センター 野洲生活学校
高島市 EEネット
循環共生社会研究所 中小企業家同友会
高島森林体験学校 (順不同)
麻生里山センター

●支援

新江州(株)
〒526-0111 滋賀県長浜市川道759-3
TEL.0749-72-5277 FAX.0749-72-8681
★ブログ 滋賀・咲くブログ★
<http://moh.shiga-saku.net/>
★ホームページ★
<http://www.mohmoh.jp/>

※記事中での写真・本文につきましては、無断転載を禁じます。